

## 第七章 柏木の物語 女三の宮密通の物語

[第一段 柏木、女二の宮と結婚]

\*まことや、衛門督は、中納言になりにかかし(ところで衛門督の藤原君は中納言に成っていたのでした)。\*「まことや」は注に<話題を転じて、以前に途中のままになっていた物語を語り起こす発語。『完訳』は「話題を呼び返す語り口」と注す。>とある。既に何度も使われている語で、現代語で言う話題転換の接続詞「ところで」と同じ語用ようだ。また、今でも「まことに」や特に関西語の「まっこと」は、単純な同意や確認を示す語と言うよりは、さらに他面での検証を加えた上で<本当に、確かに>と自分なりに納得したことを示す語、または強調語と言ったところだ。確かに「まこと」は「真実」とも表記されるし、偽りの無い<真心>という語感もあって、それが独立した概念の一語という面もありそうだが、もともとは「ま・こと」で「こと(以下に取り立てて言う事物)」を接頭語の「ま」で強調する言い方だったように見える。そして「や」は反語や疑問語の前段階として、話題の対象体である「こと」を其処までの文脈とは別に事改めて再認識することを示す語であり、此处では聞き手に注目を促す呼び掛けの語用であり、「まことや△は▽かし」の文型で<ところで(ま)例の(ことや)一件である△は▽なのでした>という言い方になるようだ。

今の御世には(今上帝の御体制にあつては)、いと親しく思われて(藤原君はとても御信頼されて)、いと時の人なり(順調に出世した人なのでした)。身のおぼえまさるにつけても(しかし身分が高くなるほどに)、思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて(三の宮を貰い上げ損ねた無念さを募らせて)、\*この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける(帝と同じ御血筋の朱雀院の内親王でいらっしゃる三の宮の御姉の二の宮を貰い上げ申したのです)。下臈の更衣腹におはしましければ(朱雀院の妃としては身分の低い更衣を母に持つ内親王でいらっしゃったので)、心やすき方まじりて思ひきこえたまへり(藤原君はこの二の宮を気安さも混じった気持で妻に迎え申しなさったのです)。\*「この宮の御姉の二の宮」ということは、女三の宮が21歳なので、23,4歳くらいだろうか。時に藤君32歳(推)だが、女二の宮は今のところ年齢不詳。

\*人柄も(二の宮は気品も)、なべての人に思ひなずらふれば(普通の身分の人に比べれば)、けはひこよなくおはすれど(その高さは格別でいらしたが)、もとよりしみにし方こそなほ深かりけれ(最初に深く思った三の宮がやはり尊く思えて)、慰めがたき\*姨捨にて(藤原君にとっては二の宮は失恋を癒しきれない三の宮代わりの内親王で手に持て余し気味ながら)、人目に咎めらるまじきばかりに(傍目に不遜と見られないほどには)、もてなしきこえたまへり(厚遇申しなさっていらっしゃったのです)。\*「ひとがら」は現代語で言う<気立て>ではないのだろう。むしろ、此处では<育ちの良さ、血統、家柄>の語感と取りたい。今でも、そういう意味はある語だと思うし、そういう育ちの良さから来る<気品、余裕のある態度>を「お人柄」と言う気もするが、今の普段の会話で「人柄」と言うと大雑把に<良い人>みたいな意味で使うことが多いようだ。が、藤原君が王家身分の気品を尊んでいたらしいことについては、当巻一章二段に<童なりしより(藤君は子供のときから)、朱雀院の取り分きて思し使はせたまひしかば(朱雀院が特に気に入って側仕えさせていらっしゃったので)、御山住みに後れきこえては(院が山の寺に御入山あそばした後は)、またこの宮にも親しう参り(今度はこの皇太子の所に親しく参じて)、心寄せきこえたり(院の御一族に敬愛を示し申ししていました)。>と、幼少期から特に朱雀院筋に近いという印象的な事情説明があった。\*「姨捨(をばすて)」はウェブ諸サイトを検索した所、どうやら大和物語(950年頃成立の歌物語)の156段にある棄老話である姨捨山伝説のことらしい。というのも、「大和物語の部屋」サイトに掲載されている156段の本文は「信濃の国に更級といふ所に

男住みけり。」と始まり、母代わりに面倒を見てくれた小母を、年老いて腰が曲がって働けないからと妻が疎んで、男に山に棄てて来る様に責め立てて、男は妻との不和が面倒で小母を一度は山に棄てたが、「この山の上より、月もいと限りなく明かくて出でたるを眺めて、夜一夜寝られず、悲しくおぼえければ、かくよみたりける、『わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て』とよみてなむ、また行きて迎へ持て来にける。それよりのちなむ、姨捨山といひける。慰めがたしとは、これがよしになむありける。」と結ばれていて、「慰めがたき姨捨にて」という此処の文の言い回しに符合するからだ。ということは、この「姥」は大和物語ではなく母代わりの小母でお荷物になっている人>だったのであり、此処では二の宮には酷な喩えながら三の宮の代わりの内親王でお荷物になっている人>という意味で語り手が使っている語、になるようだ。

なほ(今もなお藤原君は)、かの下の心忘られず(もともとの女三の宮への恋心が忘れられずに)、小侍従といふ\*語らひ人は(小侍従という相談相手の取次女房は)、宮の\*御侍従の乳母の娘なりけり(三の宮の御侍従という乳母の娘なのであり)、その乳母の姉ぞ(その乳母の姉というのが)、かの\*督の君の御乳母なりければ(藤原君の乳母だったので)、早くより気近く聞きたてまつりて(昔から直接見知った人の話として宮の御様子をお聞き申し上げて)、まだ宮幼くおはしましし時より(まだ宮が幼くいらした時から)、いときよらになむ\*おはします(とても美しくていらっしやいますとか)、\*帝のかしづきたてまつりたまふさまなど(朱雀院の帝が大事に育て申しなさることなどを)、聞きおきたてまつりて(聞き置き申し上げていて)、かかる思ひもつきそめたるなりけり(そうした恋心も付き始めたのでした)。 \*「語らふ」は<親しく語り合う>ことを言う語で、それが文意によって<情交する>ことや<説得する>ことや<依頼する、相談する>ことを示すようだ。此処では<依頼する>ということだろうが、何を「依頼する」のかと言えば<姫宮への手紙の取次ぎおよびその相談事>であり、「語らひ人」は藤原君の<取次ぎ女房>という言い方なのだろう。なお、此処の「小侍従といふ語らひ人は~かの督の君の御乳母なりければ」は、この文の主文意に対しての事情説明の挿入句という構文のようだ。 \*「御侍従の乳母」の「御」は何を指すのか、分かり難い。宮付きの乳母なので宮に対する「御乳母」の「御」なのか、それなりの王家筋の家柄の人なので乳母自身に対する尊称の「御」なのか、一応後者にとって置く。これが「御乳母の侍従」という書き方だったら文意は分かり易そうな気もするが、そうならないのだから、乳母は「侍従」ではなく「御侍従」という通り名だったのだろう。 \*「かんのきみのおんめのと」の「御」も誰に対する尊称なのか分からない。で、見逃す。 \*「おはします」の書き方については、注に<『集成』は「はじめは乳母が柏木に向って語る直接話法のような書き方で、すぐ間接話法に転じる」。『完訳』は「「一おはします」は、次の「帝の一たまふ」と並列。美貌とともに、帝最愛の姫宮である点に注意。その恋慕は彼の権勢志向に始まる」と注す。>とある。 \*「みかど」は三の宮の父帝である朱雀院のここのようだが、紛らわしい語用だ。

## [第二段 柏木、小侍従を語らう]

\*かくて(紫の上の二条院への転居療養に伴って)、\*院も離れおはしますほど(源氏殿も六条院から離れ暮らしていらっしやる時に)、人目少なくしめやかならむを推し量りて(寝殿の姫宮の御部屋近くに人目が少なくひっそりしているのを見計らって)、小侍従を\*迎へ取りつつ(藤原君は小侍従を自邸に呼び寄せては)、いみじう語らふ(じっくり相談を持ち掛けます)。 \*「かくて」は「まことや」の前に話が戻る符号のような語用らしい。 \*「院」は六条院源氏殿のことらしい。注には<紫の上が病気療養のため二条院におり、源氏もそちらにいつているという意。>とある。「院」は、朱雀院、六条院、冷泉院、とある。紛らわしい。 \*「迎へ取りつつ」は<自邸に呼び寄せては>という言い方かと思う。が、藤原君も二の宮と結婚したのだから、大臣邸を出て独立した居宅を構えたのだろうか。何の言及も無いので分からない。

「昔より(ずっと前から)、かく命も堪ふまじく思ふことを(このように寿命も持たないほどに思う姫宮への恋心を)、かかる親しきよすががありて(そなたのような身近な縁者も居て)、御ありさまを聞き伝へ(宮の御様子を私が伝え聞いて)、堪へぬ心のほどをも聞こし召させて(宮には私の抑えられない気持ちのほどもお知り頂いて)、頼もしきに(頼みにして来たのに)、さらにそのしるしのなければ(さらさら御会いできる兆しが無くて)、いみじくなむつらき(非常に辛い)。

\*院の上だに(朱雀院の上でさえ)、『かくあまたにかけかけしくて(六条院大殿がかくも多くの御方々に情けをお掛けで)、人に圧されたまふやうにて(姫宮が余人に押し退けられなさるようにして)、一人大殿籠もる夜な夜な多く(一人寝を為さる夜も多く)、つれづれにて過ぐしたまふなり(張り合いもなく暮らしていらっしやいます)』など、人の奏しけるついでにも(などと付き人が報告申し上げる時にも)、すこし悔い思したる御けしきにて(少し後悔なさるご様子で)、\*「院の上」は注に<朱雀院をいう。柏木の会話中での呼称。「すこし悔い思したる」に係る。>とある。藤君が朱雀院を「上」と認識している、ということだろうか。

『同じくは(同じ結婚で)、\*ただ人の心やすき後見を定めむには(臣下で安心できる世話役を選ぶのが良いのなら)、まめやかに仕うまつるべき人をこそ(忠実に姫宮に仕え申しそうな人を)、定めべかりけれ(相手に定めるべきだった)』と、のたまはせて(と仰せになって)、\*「ただうど」は<臣下身分の者>だが、此処に源氏殿は含まれているのだろうか。朱雀院が六条院を難じ口調でわざと貶めた、ということもあるのかと思ったが、やはり違うだろう。朱雀院は女三の宮の将来について、一生独身を通す内親王は少なくないが、この姫宮は芯が強くないので、それでは決して幸せになれないと考えた。そして、自身の出家を急ぐ為にも、姫宮の結婚を早く決めようとしたのだが、その際の婿の選定基準は、若菜上巻一章六段に朱雀院自身の詞として「六条の大殿の、式部卿親王の女生ほし立てけむやうに、この宮を預かりて育まむ人もがな。ただ人の中には在り難し。内裏には中宮侍ひ給ふ。次々の女御たちととも、いとやむごとなき限りものせらるるに、はかばかしき後見なくて、さやうの交じらひ、いとなかなかならむ。」と語られていた。さらに朱雀院は、息子の源君なら婿に良さそうだ、と続けたものの、相談を受けていた宮の御乳母が、源君は結婚したばかりで他の女に情が湧かないだろう、むしろ源氏殿こそ情に厚い、などと応えていた。そして次第にその線で婿候補が固まって、遂に姫宮は六条院に輿入れしたのだが、その選考過程に於いても朱雀院は若菜上巻二章四段で、大納言以下の候補について「ものまめやかなるべきことにはあなれど、さすがにいかにぞや。さやうにおしなべたる際は、なほめざましくなむあるべき。」と、臣下身分では姫宮の華やかさには物足りないくらいの言い方をしていた。ということは、この文の「後見を定めむには」の「定めむ」は<定めようとする>という意志ではなく<定めるのが妥当>という基準設定の言い方であり、同時に助動詞「む」は連体形の仮定構文を成して、**「には」**は<～の場合には>の意となる。

『女二の宮の(中納言に嫁いだ女二の宮が)、なかなかうしろやすく(女三の宮のように他の女と男の取り合いをすることもなく、却って安心して)、行く末長きさまにてもものしたまふなること(末長い幸せが見込めそうに暮らしていらっしやるようだ)』

と、のたまはせけるを\*伝へ聞きしに(と仰せになったのを伝え聞いたので)、いとほしくも(私には女三の宮が恋しくも)、口惜しくも(未練にも)、いかが思ひ乱るる(どんなに悩ましく思われることか)。\*「伝へ聞きしに」で渋谷校訂は句点を置いてある。が、この「に」は強調の詠嘆助詞ではなく、順接条件を示す接続助詞で、「いかが思ひ乱るる」に結ぶ構文に見えるので、私は此処を読点にしたい。で、「いかが思ひ乱るる」は下に<ことにやあらむ>くらいが省かれているのだろう。当たり前だが、朱雀院は娘の幸せを思って、准

太上天皇の六条院に嫁いだ女三の宮よりも、臣下身分ながら中納言藤原君に嫁いだ女二の宮の方が、穏やかに暮らせそうだと、一面的に単純な感想として恐らくは自邸内で気楽に発言した。それを藤君は、自分も内親王の婿として認められた、という朱雀院による自分への評価と曲解した。そして、そうであるなら、自分はもともとは三の宮に憧れていたのだから、そして小侍従もその事を承知しているのだから、「いとほしくも、くちをしくも、いかがおもひみだるる」が三の宮への恋慕だということは、この場では自明だ、と藤君は思っているの発言なのだろう。

げに(確かに私は女二の宮を)、\*同じ御筋とは尋ねきこえしかど(女三の宮と同じ御血筋ということで妻に求め申し上げたが)、それはそれとこそおぼゆるわざなりけれ(それはそれに過ぎず、御姉妹とは申せ二の宮は二の宮で三の宮に代われるものとは思えない) \*「同じ御筋」は注に<同じお血筋の姉妹だが違う人だという。母方の身分の違い(下臈の更衣腹)に基づくのである。>とある。三の宮は王族の更衣腹(若菜上巻一章一段)。

と、うちうめきたまへば(と藤君が思わず呻きなさると)、小侍従、

「いで、あな、\*おほけな(まあ何と畏れ多い)。\*それをそれとさし置きたてまつりたまひて(御正室の二の宮を別にお置き申しなさって)、また(他に三の宮を)、いかやうに限りなき御心ならむ(どうなさろうという無謀なお考えなのでしょう)」 \*「おほけな」は形容詞「おほけなし(畏れ多い)」の語幹短縮形だろうか。いや、むしろ「さはいかにおほけなきことかな」を短縮した言い方だろうか。何れにしても、語感上は分かり易い語だ。 \*「それをそれ」は藤君の言った「それはそれ」に呼応した物の言い方だが、藤君が言う「それはそれ」は「同じ御筋」でも<各自はそれぞれ別物>を意味し、小侍従の言う「それをそれ」は<二の宮を正室に>を意味していて、似たような言い方で別の事柄を示す洒落語用は指示代名詞の典型的な用法の一つで、どういう言語にも有りそうだ。が、藤君にしても小侍従にしても王家血筋の内親王を「それ」と言い放つのは、相当に不遜で畏れ多いように私などでも思えるほどで、この辺の馴れ馴れしさは幼馴染以上の親しい密室性を感じる会話だ。

と言へば、うちほほ笑みて(藤君はふと笑って)、

「\*さこそはありけれ(そういうことだってあったんだ)。宮にかたじけなく聞こえさせ及びけるさまは、院にも内裏にも聞こし召しけり(三の宮に畏れ多くも求婚申し上げるに及んだことは朱雀院にも今上帝にもご承知頂いていることなんだし)。などてかは、さても\*さぶらはざらましとなむ(どうしてそのように衛門督が姫宮に側仕え出来ないことがあろうかとのように)、このついでにはのたまはせける(朱雀院は何かの折には仰せになったことがある)。いでや(いやだから)、ただ、今すこしの\*御いたはりあらましかば(ただもう少し朱雀院に私への御温情があったとしたならさ)」 \*「さこそはありけれ」は注に<以下「あらましかば」まで、柏木の詞。>とある。この注は、写本を校訂する際の文構成の見立てを示しているのだろう。が、この「さこそはありけれ」は<それはあったことだ>という言い方で、是だけでは「さ」が特定されていないので意味不明の文だ。で、「今すこしの御いたはりあらましかば」からの倒置だとすれば、「さこそはあり(う得べ可)けれ」という言い方になっていて、「さこそ」の「さ」は<藤君と三の宮の結婚>の意味に取れる。少し乱暴な解釈にも思えるが、気心の知れた女房に藤君が推量を促す謎掛けめいた言い回しをした、と読める場面だ。 \*「さぶらはざらまし」は注に<朱雀院の詞を間接的引用。反語表現。>とある。 \*「御いたはりあらましかば」は注に<朱雀院の柏木への恩顧。反実仮想の構文。>とある。是が仮定文であってこそ、やはり「さこそはありけれ」に続くと見るべきだろう。そうであってこそ、下の「いと難き御ことなりや。」という小侍従の反論文が<藤君と三の宮の結婚の可能性の否定>として繋がる。

など言へば、

「いと難き御ことなりや(それはとても無理なご結婚でしょうよ)、御宿世とかいふことはべなるを(御宿命とかいうことがあるんですから)。もとにて(大体)、\*かの院の言出でてねむごろに聞こえたまふに(あの御立派な六条大殿が言葉に出して真心から姫宮に求婚なされたことに)、立ち並び妨げきこえさせたまふべき御身のおぼえとや思されし(比肩してその御結婚をお止め申しさせ為されるほどにあなたの御身分が高かったとお思いなんですか)。このころこそ(最近でこそ)、すこしものものしく(少し出世して威厳がありそうに)、御衣の色も深くなりたまへれ(御制服の色も濃くお成りですが)」 \*「かの院」は源氏殿のことらしい。藤君邸で話しているから「かの」であって、六条院に居るときは「この」になるのだろう。ということの他に、六条院内にあっては藤君以外の人に源氏殿を「院」と呼ぶのだろうか、とこの呼称にわざと「ただうど」との距離感を出す作為を感じる。で、あえて<御立派な>と補語して置く。が、作為といえ、此処の言い回しは小侍従の作為の塊ではありそうだ。「言出づ(こといづ、はっきり口に出して言う)」も「ねむごろ(真心を以て)」も「聞こえたまふ(求婚なされたこと)」も形式上はいざ知らず、実態とは相違する。実際には、この縁談は朱雀院から源氏殿に「かたはらいたき譲りなれど、このいはけなき内親王、一人、分きて育み思して、さるべきよすがをも、御心に思し定めて預けたまへ、と聞こえまほしきを。」(若菜上巻三章七段)と持ち掛けられたものだった。

と言へば(と小侍従が言え)、いふかひなく\*はやりかなる口強さに(口答え出来ないほどに早口で強いその口調に)、え言ひ果てたまはで(藤君はとても言い返し切れ為されずに)、 \*「はやりか」は思いが一気に噴出すかの<早口>。「口強さ(くちごはさ)」は<強弁さ>。

「今はよし(もういい)。過ぎにし方をば聞こえじや(昔のことは言わないで置こう)。ただ(しかしせめて)、かくありがたきものの際に(このように得難い人の少ない時機に)、気近きほどにて(姫宮のお側近くで)、この心のうちに思ふことの端(私が思い乱れた一端でも)、すこし聞こえさせつべくたばかりたまへ(少しお聞き頂けるように取り計らって下さい)。おほけなき心は(宮をどうこうしようなどという、大それた思いは)、すべて(全く以て)、\*よし見たまへ(ほら見てくれ、この通り)、いと恐ろしければ(とても恐ろしいので)、思ひ離れてはべり(考えていませんから)」 \*「よし見たまへ」はこの場での軽口なのだろう。が、小侍従が藤君の様子を見て、本当に宮への狼藉を働く気が無い、などと分かる筈もない。というより、「思ふことの端すこし聞こえさす」のは、第三者に対しては笑い話に出来ても、本人に対しては言い寄り以外の何物でもない。藤君がいくらおどけて軽妙さを繕っても、小侍従が惑わされることはない。が、しかし、この相談内容は藤君に呼び出された時点で、小侍従には察しが付く筈もある。小侍従にとって、藤君は無下に呼び出しを断れない立場の人だったとしても、であれば宥め賺すのが役割のようにも思われる。それが召人めいた親しげな口調で冗談に同調するかの応答振り、というのは小侍従には何か別の思惑でもあるのだろうか。そうかも知れないが、むしろ小侍従は正に藤君の召人ないし愛人関係で、この「よし見たまへ、いと恐ろしければ」は藤君が自分の屹立した男根を指して<こんな荒々しさはとても宮には畏れ多いからな>と小侍従に握らせた、と読むほうが楽しい。というより、此処の会話は全てが宮を出汁にした闇での艶笑という冗句でなければ、朝廷秩序に対して余りに畏れ多い。で、この色濃い艶話を、こういう言い方で語ってしまうところが、作者の心憎さだ。つまり、段頭の「人目少なくしめやかならむを推し量りて、小侍従を迎へ取りつつ、いみじう語らふ。」は<暇そうな小侍従を呼び寄せてはイヤラシク情交し合う>という意味だったのだ。尤も、「語らひ人」は<親しく語り合う人=情交相手>だから、むしろ従乳母子同士の間柄という説明も、幼馴染で出入りが目立たない、くらの語り口調になっていて、当時の読者にとっては是で十分に露骨な艶笑譚であり、その後の「それはそれ」

などという摘まみ食いで定番の遊び符牒やその他の会話の内容も然り乍ら、「うちうめく」「言へば」「うちほほえむ」などが情交場面の描写となっていたわけだ。特に、「はやりかなる口強さに、え言ひ果てたまはで」を受けての、此処の「よし見たまへ、いと恐ろしければ」は、今のポルノの〈フェラチオで大きくなったおチンポ〉より遥かに説得力のある具体描写に見えなくもない。それでも、作者の「語らひ人」という語用は、小侍従をただ藤君の〈情交相手〉と説明しただけではなく、宮つきの女房で藤君にとっては宮への恋文の〈取次役〉だったことも併せて示しているので、意味としては〈取次役で情交相手〉くらいの言い方になっているように見えるが、言い換え文が長々しい説明文になっては興醒めだし、と言って各語にどういう現代語を当てるのが本文の演出意図に沿うのかは、私には判じかねる。で、言い換えは一方的な露わな補語は避けて、無難に済ませて置く。ただ、この会話での話題が本来は冗談から出た事だと知ることは重要だろう。

とのたまへば(と仰ると)、

「これよりおほけなき心は(これ以上に大逸れた欲情って)、いかがはあらむ(どうなっちゃうのかしら)。いと\*むくつけきことをも思し寄りけるかな(何処までも征服欲を逞しくなさせて、本当に厭な事をお考え付きなさるものね)。何しに参りつらむ(お役に立てないなら、私は何しに此処へ参ったのでしょうか)」と、はちふく(と小侍従はふくれっ面をします)。\*「むくつけし」は、相手の浅ましさに嫌気して交感神経が刺激された〈ムカつくさま〉ではあるようだが、「むくつけ」の語感には〈向く付け=相手の事情も考えずに一方的に膨らむ〉みたいな印象がある。が、しかし、むしろ此処での要点は、小侍従が藤君を冷やかした心算で発したであろうこの軽口が、その言霊をして藤君に、本気で宮への征服欲を駆り立てたらしい語り口にある、かと思う。それはこの場面を絵に描けば一目瞭然だ。小侍従の舌戯でイキかけた藤君は、いよいよ己が男根を召人の女陰に挿入しようという場面だ。藤君は熱くなった一物を小侍従に握らせて、「此れでそなたを突き上げよう」と言った。が、そこで黙れば良いものを、照れ隠しに「今は他の女は考えない」と続けた。小侍従は藤君が第一液を漏らして精一杯なのを承知しているから、その藤君の言葉をただの強がりだと分かっている。藤君の「これよりおほけなき心」はイッテしまうので、後は他愛もなく萎むしかないと思っている。だから、売り言葉に買い言葉風に調子を合わせた軽口で応酬した。だから、「いとむくつけきことをも思し寄りけるかな」も〈駄々を捏ねてしょうがない子ね〉くらいの気分だ。だから、「何しに参りつらむ」は〈あなたが私でイケないんじゃ、来た甲斐がないわ〉くらいの男根を膺に収める商売っ気を見せた言い方だ。そして、「はちふく」は女が男の一物を腹にしっかり収めた充実感を〈ふくれっ面〉に準えて、場面描写した言い方だ。が、藤君は自分が発した「ただ、かくありがたきものの際に、気近きほどにて、この心のうちに思ふことの端、すこし聞こえさせつべくたばかりたまへ」という、この場限りの筈の扇情遊戯言葉の甘美な響きに、自ら酔った。そして、それを小侍従が「いとむくつけきこと」と手を焼くような言い方をしたことで、藤君はその話の内容に、逆に単に夢想ではない現実味のある手応えを感じて、本気で姫宮への陵辱を考え出した、と読んでみたい。というか、そう読ませるような書き方を作者はしている、と読んで置きたい。

[第三段 小侍従、手引きを承諾]

「いで、あな、聞きにく(いやまあ聞き苦しい)。あまりこちたくものをこそ言ひなしたまふべけれ(余りに酷く決め付けて物を言いなさるものだ)。\*世はいと定めなきものを(ものに限度などないものを)。\*「世はいと定めなきものを」は注に〈「世」は男女の縁。男と女の縁というのは定めない、という思想。〉とある。しかし、此処の言い方は「いで」を受けたもの、ないしは「いで」を説明するもの、でなければ不自然だ。では、「いで」は何に対しての反語なのか。それは、小侍従の言った「これよりおほけなき心はいかがはあら

む(これ以上大きくなれないわよ)。いとむくつけきことをも思し寄りけるかな(いくら大きくなったって私は中に収めますから御心配なく、是位にしておく、なんて背負ったこと言ってるわ)。何しに参りつらむ(しっかり勃たせてちゃんと搾り出さないと、私は役目が果たせませんから)」という召人の見透かしに対して、実際には抗し切れないにしても、つい藤君は少しは強がってみたくて、せめての一言に一般論を持ち出してでも思わず茶々を入れた、というところだろう。だから、この「よ」は広く言えば<世間一般のものごと>であり、狭く言えば「余(自分、自分の一物)」かも知れない。「定めなし」は<変わりやすい。無常だ。>という言い方らしいが、聞での戯言であってみれば<決まりはない→限度がない>と洒落て使ったとは見做せるだろう。というか、むしろ逆に、ちょっと強がった心算の一言の「定めなきものを」の言霊が、本来の語意の<ままならない>を喚起して、以下の話題展開へと続いていくという、作者にしてみればシテヤツタリの筆致なのかも知れない。

女御、后も(女御や后という身分の人でも)、\*あるやうありて(妃同士でいろいろと揉め事がありがちで)、ものしたまふたぐひなくやは(厭な思いを為さる場合無くもないだろう)。\*まして、その\*御ありさまよ思へば(増して今の姫宮の境遇なるものを思えば)、いとたぐひなくめでたけれど(それは並ぶ者がなく立派な暮らしぶりだが)、うちうちは心やましきことも多かるらむ(内情は不満も多くあるだろう)。 \*「あるやうありてもものしたまふたぐひなくやは」については、注に<反語表現。『集成』は「わけがあつて男と情けをかわされるようなお方がないわけでもあるまい」と訳す。>とある。が、『集成』は飛躍した文意解釈ではないだろうか。「あるやうありて」は、一般的な言い方に解せば、宮仕えでは<御所内での妃勢力同士での張り合いが絶えないので、揉め事がありがちで>という事情説明、かと思う。「ものす」は<不快に思う>で、此処の文意は<競争が激しくて厭になることもお有りだろう>だろう。 \*「まして、その御ありさまよ。思へば、」としてある此処の校訂文について、どうにも文意が掴み難く、写本画像サイトで様子を見てみた。すると該当部近辺だが、東京国立博物館本(76/151)では「あるやうありてもものし給たくひなくやはある ましてその御ありさまよ おもへばいとたくひなくめでたけれど」、京都大学本(v. 33, pp. 134-135)では「あるやうありてもものし給たくひなくやは ましてその御ありさまよ於もへばいとたくひなく めてたけれど」、とあるようにも見えるが、判然としない。で、結局わからない。で、自分なりに読み易い読み方をしてみた。「まして」は身分のことなのか、事情なのか。まあ「思へば」なのだから、事情を考えたのだろうとは思うが、それにしても宮に対する敬語もなく、とにかく分かり難い文だ。が、その分かり難さも、藤君が息を荒げながら口走った、と思えば楽しい。 \*「御ありさま」は<姫宮の御事情、御境遇>ということらしい。「御」の威力を最大限に利用した言い方のようだ。

\*院の、あまたの御中に(姫宮は朱雀院が多く御子たちの中で)、また並びなきやうにならばしきこえたまひしに(他に並ぶ者が無いほどにご教育申しなさったというのに)、さしもひとしからぬ際の御方々に\*たち混じり(それと同等の身分の高さでもない他の六条院の御方々に立ち混じっている)、めざましげなることも\*ありぬべくこそ(心外なことも起きてしまうとのように)いとよく聞きはべりや(詳しく聞いていますよ)。 \*「院」は朱雀院のことらしい。非常に紛らわしい。 \*「たち混じり」の主語は姫宮だろうに、敬語遣いは無い。 \*「ありぬべし」は<どうしても起きてしまう>。「ぬべし」は完了の助動詞「ぬ」の終止形に推量可能の助動詞「べし」がついたもので<そうになってしまうのは止むを得ない>みたいな言い方、だと思ふ。

世の中はいと\*常なきものを(世の中は思うようにならないものなのに)、\*ひときはに思ひ定めて(収まったものと決め付けて)、はしたなく(分別の無い端者のように)、\*突き切りなることなのたまひそよ(突き放した物言いは為さいますな) \*「常なし」は<変わりやすい。無常だ。>と古語辞典にある。「無常」は<一定しない、ままならない>だが、「ままならない」は<思うようにならない>で、その語感

が上文を受けた言い方としても意味が通る。\*「ひときは」は渋谷訳文に<一概>とあり、大辞泉にも<ひとまとめ>と説明がある。また、古語辞典には「ひときはに」を<ひとすじに、一途に>とある。が、「きは」は別のものとの<境>であり、それは<決められた区分>であり、「ひと」は<一度決めた、一定の>の意だから、「ひときは」は<一度決まった変わらないもの>であり、少なくとも此处ではそういう語用だ。\*「突き切り」は<突き放し>。「突き切りなること」は<突き放したものの言い方>。ではあるようだが、是が聞での、それも目交い最中の言葉漏らしであってみれば、藤君は果てる間際にく今日はココまでだが、私の情熱をこんな程度のモノだとは思いなさるなよ>と女に気を持たせる強がりを行った、ような描写に見えるし、そう読者に読ませるための「突き切り」という作者の語用に見える。それと、もし是が本当に女の手による物語だとすると、是は女が男の<「突き極り」を感じて声を出す>という実感を示した言い方か、と思えば楽しい。と読んでみると、「はしたなし」は小侍従の浅知恵と藤君の小者振りの両方を笑い飛ばしたい、という藤君の気弱さの裏返しに思えてくる。

とのたまへば(と藤君が仰ると)、

「人に落とされたまへる御ありさまとて(他の人より下に置かれていらっしゃる御境遇と言つても)、\*めでたき方に改めたまふべきにやははべらむ(姫宮は本妻の立場の対の上に成り代わることはお出来になりません)。\*「めでたき方」は渋谷・与謝野の両訳文共に<藤君と結婚なさる宮>と取っているようだが、疑問だ。確かに藤君は、自分と宮が結婚したかも知れない、みたいな経緯もあったことを口にはしたが、それは小侍従に身の程知らずとたしなめられた。此处で藤君が話題にしているのは、宮の不遇だ。いや、読者が藤君の魂胆を疑うのは自由だし、話題のすり替えと思うのも勝手だが、小侍従との会話での話題は、あくまで宮の不遇だ。そして小侍従は、宮の実情について、高貴な人として寝殿に奉られてはいるが、殿は東の対に自室を構えて、対の紫の上を実際には本妻としており、宮は客妻として殿の通いを待つ身である事を認めた。しかし、宮は対の上を取って代わることは出来ないし、そういう存在ではない、というのが此处の文意なのだろう。即ち、「めでたき方」は<対の上>を示す。ただ、「めでたき方」の言い換えとしては<本妻の立場>くらいだろうか。此处では一応、「めでたし」は「愛づ(めづ、喜ぶ)」の連用形に「達す(たつす、至る)」が付いた語の連用中止が形容詞化したもの、と故事付けてみたい。「達す」は「足る(充分になる)」の連用形に「為(す、作用を及ぼす)」がついた「たりす」の促音便で、その促音の「っ」もやがて省かれて「たす」となる、と勝手に決め付けた。即ち、「めでたし」は<今以上に喜ばしい>で、「めでたき方」はその客観的な形を示す<名実共に備わった本妻の立場>だ。

これは世の常の御ありさまにもはべらざ\*めり(このご結婚は普通の御事情では御座いません)。ただ(偏に宮が)、御後見なくて漂はしくおはしまさむよりは(朱雀院が御出家あそばした後に、御面倒を見てくれる方がいなくて頼り無くお暮らなさるよりは)、親さまに(六条殿を親代わりに)、と譲りきこえたまひしかば(とお譲り申しなさったもので)、かたみにさこそ思ひ交はしきこえさせたまひためれ(御両院同士で互いにそのように思い交わし申しなさったものなのです)。あいなき御落としめ言になむ(宮が対の上に不満をお持ちというのは、間違えたあなたの悪口なのです)」\*「めり」は<～のようです、～でしょう>と一歩引いた言い方だが、不確かな事を推量しているのではなく、物事の主体が自分ではないので、傍目での判断としてということを示す言い方、のようだ。だから、関与の度合いによっては断定の語調にもなるだろうし、宮の側女房であれば、むしろ事情の説明語調だ。

と(と小侍従が)、\*果て果ては腹立つを(遂には怒り出したのを)、よろづに言ひこしらへて(藤君はいろいろと言いなだめて)、\*「果て果ては腹立つ」は複意または表意では<コトが終わっても機嫌が悪い>という言い方だ。いや、「果て果ては」は先の「果て」が<藤君の射精>で、次の「果ては」が<その後の話で>だ



とすれば、是はく後戯にまで引きずる藤君の宮に近づく手引きを強要する話に腹を立てたのを>という言い方なのかも知れない。やはり藤君は「突き切りなることなのたまひそよ」と言いながらイッタのだろう。コトの推移をまとめれば、最初は丸々冗談の寝物語だった宮の話、それはいつもの事だったのだろうが、源氏殿が六条院を離れている今この時にあっては、藤君には意外にも自分の口を吐いた言葉が冗談半分というか本気半分の話に思えてきた。そして、いつになく興奮したまま果ててみると、小侍従の拒否が程よい現実味を感じさせる抵抗となつて、もうそれは抑えきれない欲望に変わっていた。だから、どうしても会えるように手筈を整えろと小侍従に迫った。が、小侍従は無理だと断る。が、藤君は引かない。小侍従は困ったし、困らせる藤君に腹を立てた。で、藤君は、無茶はしない、少し話すだけで、宮も退屈だろうから、風変わりなことがたまには有ってもいいだろう、と「言ひこしらへ」たのだろうし、そういうことがあれば、また自分たちも刺激されて楽しめる、くらいのことも言ったのだろう。小侍従も今日の藤君の激しさを思い出して、「突き切りなることなのたまひそよ」という藤君の言葉に少し期待した、ということかも知れない。

「まことは(実際の所は)、さばかり世になき御ありさまを見たてまつり馴れたまへる御心に(あの世に又となく優れた六条殿の御姿を拝し慣れていらっしゃる宮の御心に)、数にもあらずあやしき\*なれ姿を(物の数にも入らない不様な私のみすぼらしい姿を)、うちとけて御覧ぜられむとは(馴れ馴れしく御覧に入れようとは)、さらに思ひかけぬことなり(まったく思っていないことです)。 \*「なれ姿」は歌語的表現、と注にある。ただ、「馴る」という語自体に<馴れて親しむ>という意味と<着古してくたびれる>という意味とが元々あるので、「なれ姿」という言い方はその両方を複意させた<色男のだらしない風情>という語感が自然に出て来るようにも見える。

ただ一言、物越にて聞こえ知らずばかりは(ただ一言物陰越しに私の思いをお知らせ申し上げるだけのことが)、何ばかりの\*御身のやつれにかはあらむ(どれほど宮御自身の崇高さが揺らぐことになるものでしょうか)。神仏にも思ふこと申すは(神仏にも思うことを申すのは)、罪あるわざかは(罪になりましょうや) \*「御身のやつれ」は分かり難い。現代語の語用で見れば、「恋に身をやつす」といえば<立場も顧みず恋に没頭する→身を滅ぼしかねない>という言い方かと思うが、だとすれば、いくら其れを否定されても、「破滅」の可能性が感じられる言い方なら、小侍従は決して藤君の手引きはしないだろう。が、先読みは不本意ながら下文を読めば、どうやら小侍従は手引きを引き受けたいので、是が小侍従に対して一定の説得力を持った言い方だったものとして、その語意を考えてみたい。注には<『集成』は「「やつれ」は、身を落すというほどの意」。『完訳』は「宮の御身の疵になるまいの意」と注す。>とある。また、渋谷訳文は「ご迷惑」としてあり、与謝野訳文は「宮様の尊厳をそこねること」としてある。普通に考えれば、恋情を告白された宮は、藤君との恋に思い悩みかねない。それが「御身のやつれ」の語感だ。が、それを藤君は「神仏」を持ち出すことで言葉の意味をすり替えた。一体、何処を如何したら姫宮を神仏に準えることが出来るというのか。神仏は人智を超えた崇高な存在だ。一方、姫宮は21歳になったものの、一人前の大人の女としては頼り無い幼さだと何度も語られている。色欲惚けがなければ、小侍従ならずも誰一人と納得する筈もない論理飛躍だ。やはりこの日の藤君はいつになく逞しかったのだろう。と、話が逸れたが、つまりこの「御身」は神仏の崇高さを備えた<宮の存在>であり、「やつれ」は神仏の揺るぎ無い大きな力が決して見せない<悩み衰えた姿>であり、その「御身のやつれ(宮の崇高さの揺らぎ)」が無いという言い方で、元の「御身のやつれ(宮が恋悩むこと)」まで否定し切る、という言い回しになっているようだ。上手く言い包めた話しっぷり、ということになるのだろうか。私には、余りにも強引で、ほとんど信じられない話という印象だ。やはり是は色恋沙汰の女語りだけでは不十分で、権勢事情として、小侍従が王家の権威に目を瞑ってまでも、藤原左家に便宜を図らなければならない立場に置かれていた、という荘園自治の拡大局面を舞台背景に思い描く必要があるようだ。

と(と藤君が)、いみじき\*誓言をしつつのたまへば(くどいほど繰り返し間違いを起こさない誓いを言いながら手引きを頼みなさるので)、しばしこそ(小侍従は暫くの間こそ)、いとあるまじきことに言ひ返しけれ(とんでもないことと言ひ返したものの)、\*もの深からぬ若人は(立場上深くは立ち入れない若女房としては)、人のかく\*身に代へていみじく思ひのたまふを(中納言殿が肩書きにものを言わせて強く思いを仰るのを)、え否び果てで(とても拒みきれずに)、\*「誓言」は「ちかこと」と読みがある。\*「もの深からぬ若人」という言い方で<小侍従が納得したこと>を作者は説明している、のだろうか。だとしても、この「もの深からぬ若人」は<ものを深く考えない若女房>という言い方ではないだろう。そんな者に宮付きの女房が務まる筈もない。また<男女の仲を良く知らない若女房>でもないことは、小侍従は藤君の召人なのだから自明だ。そも、小侍従は「人のかく身に代へていみじく思ひのたまふをえ否び果てで」止む無く手引きを引き受けたのであり、「もの深からぬ若人」だから<納得した>ワケではない。この短い「もの深からぬ」という説明は、小侍従の立場を女房仲間の悲しさが身に詰まされるので、言葉少なに、しかし庇いたくて、作者が書かずにはいられなかったもの、かと思う。「もの深からぬ」の「もの」は此処に語られている表向きの事情、とは即ち、藤君が藤原左家の惣領で小侍従が宮付きの女房という身分上の違いだ。「深からぬ」は<深くあらず=深く関わられる立場ではない>。だから、逆に言えば、身分違いながら聞き及んだ話として、不穏な動きを殿に注進申し上げて藤君を裏切ることも出来ただろうに、召人の性が藤君に従わせた、また藤君は召人だから小侍従に頼んだ、という次第。\*「身に代へて」は<命に代えて>ではなく<肩書きにものを言わせて>というパワハラだ。

「もし、さりぬべき隙あらば(もしちょうど良い折があれば)、たばかりはべらむ(お計らい致します)。院のおはしまさぬ夜は(殿がいらっしやらない夜は)、\*御帳のめぐりに人多くさぶらひて(宮の帳台のまわりに女房たちが多く控えて)、\*御座のほとりに(宮の御側にも)、さるべき人かならずさぶらひたまへば(それなりの上臈がお必ず控えなさっていらっしやいますので)、いかなる折をかは(どういう時に)、隙を見つけはべるべからむ(そういう機会を見つけ出せば良いものやら)」\*「御帳(みちやう)」は「御帳台(みちやうだい)」のこと。天蓋付きのベッド。\*「御座(おまし)」は<貴人の居場所>。「御帳のめぐり」は「人多くさぶらひて」で、「御座のほとり」は「さるべき人」が「さぶらひたまへば」と敬語遣いになっている。「さるべき人」は乳母や上臈なのだろう。

と、わびつつ参りぬ(と困りながら帰参しました)。

#### [第四段 小侍従、柏木を導き入れる]

いかに、いかにと、日々に責められ\*極じて(どうだどうだと毎日手引きの催促で責め立てられ困って)、さるべき折うかがひつけて、消息しおこせたり(小侍従は良きそうな日を見計らって藤君に知らせを遣して来ました)。\*「極じて」は「こうじて」と読みがあり、注には<明融臨模本は「功」と傍書。『集成』『新大系』は「極じて」。『完訳』は「困じて」と宛てる。>とある。

喜びながら、いみじくやつれ忍びておはしぬ(藤君は喜びながらごく質素にして隠れて六条院にいらしていました)。

まことに(実際にこの忍び込みは)、わが心にもいとけしからぬことなれば(藤君は自分でもとても畏れ多いことなので)、気近く、なかなか思ひ乱るることもまさるべきことまでは、\*思ひも寄らず(近づくと却って苦しい胸の内が激高してしまうかも知れないことまでは思いも寄らず)、

ただ(それまではただ)、\*「思ひも寄らず」は気に成る言い方だ。是は、この時点ではまだ藤君は姫宮に「気近く」ないのであり、「まことに」「気近く」なった場合には「なかなか思ひ乱るることもまさる」ことになる、という非常に重大な事柄を、作者はあっさり示してしまっているワケで、いくら「べし」と可能性に過ぎない言い方を装っても、「思ひも寄らず」と意外というか正に劇的な展開を予告する、その場面での劇的な演出を損ないかねないこの書き方は、この作者にしては、それこそがとても意外だ。

「いとほのかに御衣のつまばかりを見たてまつりし\*春の夕の(ほんの少し宮のお召し物のつま先だけを押し申し上げたこの前の蹴鞠の日の夕方の)、飽かず世とともに思ひ出でられたまふ御ありさまを(忘れられずに時を追うほど思い出されまする貴女様の御姿を)、すこし気近くて見たてまつり(わずかでも近くで押し申して)、\*思ふことをも聞こえ知らせては(この気持をお知らせ申したなら)、\*一行の御返りなどもや見せたまふ、あはれとや思し知る(一行ほどのお返事でもお見せになろうかというほどの御気持を持っていただきたい)」 \*「春の夕(はるのゆふべ)」は、若菜上巻十三章四段に「弥生ばかりの空うららかなる日」と語られた蹴鞠の日の夕方だろうが、それももう六年前のことで、藤君 26 歳、姫宮 15 歳、くらいと目される頃のことだった。 \*「思ふことをも」の「も」は<「もし」の假定構文を成す係助詞>のようだ。注には、「聞こえ知らせては」について<「は」について、『集成』は係助詞「は」、「自分の気持もお話し申し上げたら」。『完訳』は接続助詞「ば」假定条件の意、「この意中をもお打ち明け申し上げたならば」と訳す。>とある。「も」が假定構文を示し、「は」は假定条件を示す、のだろう。 \*「ひとくだりのおんかへりなどもや〜」は假定構文中の述辞なので、「あはれとや思し知りて、一行の御返りなどもや見せたまふらむ」を倒置させた言い方なのだろう。で、倒置させない場合の文意は<真心に感じ入りなさって、一行の御返事だけでもお見せ為さりはしないだろうか>という希望観測だ。が、倒置して「あはれとや思し知る」を強調した場合の文意は、客観予測の<だろうか>よりは強い希望の<であってほしい>が示されている、ように見える。

とぞ思ひける(どのように考えていたのです)。

四月十余日ばかりのことなり(しぐわちじふよにちばかりにことなり、四月十日過ぎのことです)。\*御禊明日とて(みそぎあすとて、明日が葵祭りに先立つ齋院のお清め式ということで)、齋院にたてまつりたまふ\*女房十二人(その行列に付き従うために遣わせ申し上げる上臈女房の十二人や)、\*ことに上臈にはあらぬ若き人、童女など(その他の上臈ではない若女房や童女なども)、おのがじしもの縫ひ、化粧などしつつ(各自衣装合わせや化粧支度などをしては)、物見むと思ひ\*まうくるも、とりどりに暇なげにて(見物しようとして準備している姿もそれぞれに忙しそう)、御前の方しめやかにて、人しげからぬ折なりけり(姫宮の御部屋がひっそりとして女房がほとんど居ない時なのでした)。 \*「御禊明日とて」については、注に<賀茂祭(四月中西の日)の前の御禊、吉日を選んで行く。>とある。此处で言う「御禊(みそぎ)」は、齋院が葵祭りに先立って鴨川でお清めをする儀式、のことらしく、その際に御所からも要人を齋院行列の従者に遣わせる習いになっていたようで、葵巻での 25 年前の例の車争いとなった御禊の日には、その齋院に供奉して時の右大将であった源氏殿が行列に仕えていた。そして、今の齋院が姫宮に近しかったのか、あるいは姉妹か従姉妹あたりで、行列の従者に女房を差し出した、という事情だったのかも知れない。が、実の所は良く分からないので、そんなことだろうかと思当してみるだけだ。どこまでいっても、当時の世情、ことに貴族の生活など私に分かる筈も無い。 \*「女房十二人」は注に<女三の官方から賀茂祭の奉仕のために女房を十二人差し出した。後文から上臈の女房と推量される。>とある。「後文」とは是に続く下の文のことだろうか。一先ず従って置く。 \*「ことに上臈にはあらぬ若き人、童女など」は注に<祭の奉仕には関係ない中臈の女房や若い女房そして童女ら、祭見物する側の人たち。>とある。ということは、この「ことに」は<その中で

特に>ではなく<それとは別に>という言い方の副詞らしい。\*「まうくる」は「設く(準備する)」の連体名詞で<準備している様子>。

近くさぶらふ\*按察使の君も(この日は共に宮近くに控える女房の按察使の君も)、時々通ふ\*源中将、責めて呼び出ださせれば、\*下りたる間に(時々通っている源中将が無理に呼び出させたので下がっていた時で)、ただこの侍従ばかり、近くはさぶらふなりけり(ただこの小侍従だけが近くには控えていたのです)。\*「按察使の君(あぜちのきみ)」は女房の通り名。以前の登場は無い、かと思う。また、以降の登場も無いのだろうか、特に注釈も無い。\*「源中将」は「げんちゅうじやう」と読みがある。注には<女三の宮の側近の女房に通ってくる源中将。源中将は系図不詳の人だが、若い中将といえ、出世コースにある人。>とある。\*「下りたる間に(おりたるまに)」は注に<局に下がっている間に。>とある。「通ふ」というのは<局でコトに及ぶ>ということなのか。意外と大胆な印象だ。

よき折と思ひて(小侍従は良い機会と見て)、やをら\*御帳の東面の御座の端に据ゑつ(藤君をそつと御寝台の東側に設けた出入り口の宮がいらっしゃる近くに座らせたのです)。\*さまでもあるべきことなりやは(物越しの対面どころか行き成り寝所への案内とは、こんなに近づくことまで出来るのか、と藤君は一気に動揺したという訳です)。\*「御帳の東面の御座の端」とはどういう位置になるのか。御帳台は寝殿母屋の西側部屋に設置されている。そして、「ひんがしおもて」とあるから、東側に出入口が来る設置向きだ。が、では、藤君はそれまで何処に控えていたのか、というより隠れていられたのか。いくら人の出入りが少ない日とは言っても、こういう絶対秘は誰にも僅かにでも見られてはいけない。その辺の所は是では分からないはまだ。ただ、だから小侍従は、中途半端に几帳越しの対面などを用意することが出来ずに、一気に寝所にまで藤君を手引きするしかなかった、という本当に非常に緊張する役割を演じた、ということではあるのかも知れない。\*「さまでもあるべきことなりやは」は注に<『一葉抄』は「双紙詞也」と指摘。『集成』は「小侍従の軽率さを批判する草子地」「そんな所にまで引き入れてよいものだろうか」。『完訳』は「小侍従への語り手の評言」「じっさいそんなことまですべきだったのだろうか」と注す。>とある。確かに草子地ではあるだろうが、是は「小侍従の軽率さを批判する草子地」ではないだろう。「さまでもあるべきことなりやは」は<こんなことまで有り得るとは>という驚きの言い方だ。そして、それはその場に案内された藤君自身の驚きであり、それをそのまま地文として書くことで、その驚きを読者にも感じさせようと作者が工夫した演出なのだろう。つまり、「御座の端に据ゑつ」で、上文の「まことに、わが心にもいとけしからぬことなれば」に戻り、かくも「気近く」、に続いて、「さまでもあるべきことなりやは」と「なかなか思ひ乱るることもまされり」と書くべき文を、作者は臨場感を意図して、このような変則文にしてある、と私は読む。やはり、作者は不用意に展開を予告していたのではなかった、ようだ。が、今となっては分かり難い書き方に見えるし、当時の読者にとってもどれほど効果的だったのかは、私などには想像がつかない。ただ、野心的な執筆姿勢ではあるのかも知れない。

#### [第五段 柏木、女三の宮をかき抱く]

宮は、何心もなく大殿籠もりにけるを(宮は無心にお寝みになっていらっしゃったが)、近く男のけはひのすれば、院のおはすると思したるに(近くに男の気配がするので源氏殿がいらっしゃるとお思いになったところ)、うちかしこまりたるけしき見せて(その男は畏まった態度で)、\*床の下に抱き下ろしたてまつるに(寝台の下に抱き下ろし申したので)、物に襲はるるか(賊か魔物に襲われるかと)、\*せめて見上げたまへれば(必死に目を見開きなざると)、あらぬ人なりけり(それは殿ではない人なのでした)。\*「床の下に」については、注に<御帳台の浜床の下に。『河海抄』

によれば、浜床の高さは三尺という。また『類聚雑要抄』には一尺あるいは九寸の例が見えるという。>とある。「浜床」は風情のある語感で、陸に上がる上がり口を思わせる取っ掛かりの低い段という語意だろうか。古語辞典では、「浜床」は帳台に置いた<高さ 50 センチほどの方形の台>とあり、帳台の図説にはその上に畳を敷いてある。\*「せめて見上げたまへれば」は注に<『集成』は「見上げ」。『完訳』は「見開け」と宛てる。>とある。「責む」を<追求する>語感と取れば、「せめてみあく」は<犯人を確かめようと目を見開く>くらいの言い方に見える。

あやしく聞きも知らぬことどもをぞ聞こゆるや(その男は変な訳の分からない事々を申すではないか)。あさましくむくつけくなりて、人召せど(宮は驚きと恐ろしさに人をお呼びになったが)、近くもさぶらはねば、聞きつけて参るもなし(近くには誰もいないので聞き付けて参上する者も居ません)。わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬけしき、\*いとあはれにらうたげなり(畏れに震えていらっしゃる宮が水のように汗を流して何もお考えなされない様子は藤君には実にたまらなく愛しかったのです)。\*「いとあはれにらうたげなり」を地文と読むと、非常な悪徳文になってしまう。奇襲されて狼狽する女を<とても風情があって可愛らしいのだった>などという言い方は、まるで猟奇映画の異常者描写だ。いや、だから是は藤君が感じた宮の印象を、臨場感を持って示した文、と読むべきだろう。

「数ならねど(私は物の数ではない身ですが)、いと\*かうしも思し召さるべき身とは(決して素性のお知りなされない恐ろしい輩では)、思うたまへられずなむ(御座いません)。\*「かうしも」の「かう」は宮が「思し召さるべき」ものを指している。宮はこの男を狼藉者と思っている。そして、藤君は狼藉者に違いない。だというのに、それを否定するとすれば、「狼藉者」ではあるが、それらが通常は属性とする<素性の知れない怪しい者>ではない、と言っているのだろう。

昔よりおほけなき心のはべりしを(昔から私は貴女への畏れ多い恋心を抱いておりましたが)、ひたぶるに籠めて\*止みはべなましかば(何とか押し込めて抑え切れたものであったなら)、心のうちに朽たして過ぎぬべかりけるを(この胸に秘めたまま時が過ぎるのを待つて終わりに出来たものを)、\*「止みはべなましかば」は<反実仮想の構文。「過ぎぬべかりけるを」に係る。>と注にある。「なまし」は<完了の助動詞「ぬ」の未然形に仮想の助動詞「まし」がついたもの>と古語辞典にある。つまり是は<「止みはべりぬ」てあら「ま(ほ)しく(か)ありせ「ば」>の音便形だ。

なかなか(そうは出来ずに)、漏らしきこえさせて(つい結婚を申し込みさせていただいて)、院にも聞こし召されにしを(朱雀院に於かれてもその意向をお知り頂いたところ)、こよなくもて離れてものたまはせざりけるに(まったく問題外とは仰せにならなかったのに)、頼みをかけそめはべりて(望みを持ち始めはしたのですが)、\*身の数ならぬひときはに(私の身分が内親王を娶るには物の数ではない一段劣ったものだったので)、人より深き心ざしを\*空しくなしはべりぬること(源氏大殿より深いあなたへの思いを諦めるしかないものと)、動かしはべりにし心なむ(考えを変えてしまった弱気というものが)、よろづ今はかひなきことと思うたまへ返せど(どうにも今は言っても仕方が無いこととは思い返し致しますが)、\*「身の数ならぬひときはに」は注に<身分が源氏より劣っていたことをいう。>とある。が、藤君は六年後の今年になってやっと中納言に昇進したのであり、当時は役職こそ衛門督だったが、太政官としては平の参議で、准太上天皇の源氏殿とは二刻みか三刻みほども離れていた。などという細かな言い掛かりは然して意味もなく、大意は実際の婿殿である六条院源氏殿と自分との比較で

ある事は確かだろう。だから、むしろ「人より」を<源氏大殿より>と明示するべきに思う。 \*「むなしくなす」はくからっぽにする→無いようにする>で、「心ざし」に対しては<諦める>という言い方、かと思う。

いかばかりしみはべりにけるにか(どれほど深く染み付けた思いなのでしょう)、年月に添へて(年を追うほどに)、口惜しくも(忘れられずに)、つらくも(気持が研ぎ澄まされて)、むくつけくも(激情とも)、あはれにも(思い詰めるにも)、いろいろに深く思うたまへまさるに(いろいろに深くあなたへの思いが増して来るので)、せきかねて、かくおほけなきさまを御覧ぜられぬも(堪え切れずにこのような畏れ多いことを御覧に入れてしまっていますが)、かつは、いと思ひやりなく恥づかしければ(反面では本当に思慮浅く気が引けますので)、罪重き心もさらにはべるまじ(痴情に及ぶ罪深い気持は決して持っておりません)」

と言ひもてゆくに(と藤君が言い持って行くと)、この人なりけりと思すに(宮も衛門督だとお分かりになったが)、いとめざましく恐ろしくて(とても大きな驚きと恐ろしさに)、つゆいらへもしたまはず(一言のお返事も為さしません)。

「いとことわりなれど(突然のことに言葉も無いのは至極尤もなことですが)、世に例なきことにもはべらぬを(女の寝所に恋焦がれた男が忍び込むのは、世に例のないことでも有りませんのに)、\*めづらかに情けなき御心ばへならば(例に違えて情味の薄い御返答ならば)、いと心憂くて(悲しさのあまり)、なかなか\*ひたぶるなる心もこそつきはべれ(却って激情も興りかねません)、\*あはれとだにのたまはせば(気持ちは分かったとだけ仰っていただければ)、それをうけたまはりてまかでなむ(そのお返事を有難く承って退出します)」 \*「めづらか」は<普通と違っているさま。めったにないさま。>という形容動詞と古語辞典にある。「世に例なきことにもはべらぬを」をそのまま受けた言い方と取る。 \*「ひたぶるなる心」は<抑えの利かない激情>で、この場で言う「激情」は<強姦>を意味する。宮に対して何という脅迫か。などと、この期に及んで言う方が痴しい。 \*「あはれ」は<哀れ>ではない。この語は、いつも<ああ我>と言い換えてその場での意味を考えなければならない。是が<悲しいこと>や、まして藤君を<可哀相な者>という意味なら、宮もあっさりそう言えただろう。それでこの場は収束する筈だ。しかし、此处で「あはれ」と言ったら、それは気持の受け入れを意味し、情交の承諾を意味する。「それをうけたまはりてまかでなむ」は<合意の上で情交して帰る>だ。何れ、こういう場面になってしまっただけは、宮に逃げ道などない。

と、よろづに聞こえたまふ(と藤君は硬軟織り交ぜたあらゆる言い方で宮を口説き申しなさいます)。

## [第六段 柏木、猫の夢を見る]

よその\*思ひやりはいつくしく(外から想像する分にはおごそかで)、もの馴れて見えたてまつらむも恥づかしく推し量られたまふに(馴れ馴れしく御会い申し上げるのも気が引けるほどに推し量られなさる内親王の印象なので)、「ただかばかり思ひつめたる片端聞こえ知らせて(ただこれ程までに思い詰めた恋情の一端でもお知らせ申して)、\*なかなかかけかけしきことはなくて止みなむ(とうてい情交に及ぶことは無しに終えよう)」と思ひしかど(と藤君は思っていたが)、 \*「思ひやり」は<同情すること>ではなく<想像すること>の意味らしい。「遣る」は<遠く離れたものに作用する>語感だし、今でも「思い遣る」は<想像してみる>という意味で使うが、「思い遣り」というと現代語では専ら<他人

の心情に配慮する>という意味に使われるので、一見では意味が掴み難い。\*「なかなか」は<中途半端、なまじっか>くらいの語感だが、「なか」という厚みのある語を重ねる音感上の含みの多さが、語意に込めるいろいろな気持を代入できる記号になっているかのようで、否定文中では<本質的に難しいと認識している物事について安易に手を出すのは止めて置くべきだ=面倒なことばかりで得るものがないとの予見を示す言い方>として用いられるのは今日でも変わりがない。その際の言い方としては<とうてい出来ないだろう、とても無理だ>という意味だ。「かけかけしきこと」は<情交>。

いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで(実際に間近に抱き寄せ申してみると、然程には取り澄ました近づき難さは無くて)、なつかしくらうたげに(親しみがあって可愛らしく)、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの(おっとりとして穏やかにもものやわらかいばかりに見えなさる宮の御姿は)、あてにいみじくおぼゆることぞ(上品でたまらなく思えるところが)、\*人に似させたまはざりける(妻の二の宮とは違っていらっしやいました)。\*「人に」は渋谷文では<誰とも>としてあって、「人」は<他の女のすべて>と取ってあるようだが、この「人」は<妻>であって、それは姫宮の姉の二の宮であって、姉宮は既に肌の感触に覚えがある者であって、姫宮を姉宮と比べるとという気安さが、六条大殿の妻と遠く仰ぎ見る壁の高さを一気に引き下げた、という藤君の心理描写を作者はしているに違いない。

\*賢しく思ひ鎮むる心も失せて(しっかり冷静に自制していた分別も消えて)、「\*いづちもいづちも率て隠したてまつりて(何処へなりとも宮を隠しお連れ申して)、わが身も\*世に経るさまならず(自分も藤原氏の名声に生きる事無く)、\*跡絶えて止みなばや(世間から断絶して決着をつけようか)」とまで思ひ乱れぬ(とまで思い乱れました)。\*「賢しく(さかしく)」は<賢明にも>という順当な言い方なのだろうか。本当に賢明なら、こんな危険な忍び込みはしないのではないか。だとしたら、この「さかし」は<小賢しく、利口ぶって>くらいの揶揄口調かも知れない。とも思ったが、この際どい場面での軽口口調は緊張感を損なうので、やはり順当な語用と見て置く。\*「いづちもいづちも」は<何処へなりとも>という言い方、と古語辞典にある。\*「世に経る」は藤君にあっては<藤原氏の名声に生きる>。それを捨てると言うが、藤君の宮への憧れは、藤氏長者として王家に種を蒔くという権勢志向が土台に在るのであり、こういう本末転倒の思い付きは必ず自滅する。が、その危うさを遊ぶ、という始末の悪い性癖が社会組織機構に生きるヒトには、また必ずついて回る。\*「あとたゆ」は<姿を消す、世間と断絶する>と古語辞典にある。「止む」は<決着をつける>という意味の<終わりにする>。「なばや」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形に仮定項提示の助詞「ば」がつき、問題提起の助詞「や」を添えた言い方で、上の事柄が<~となってしまうとしたらどうなるだろうか>といった組み立てだが、この「や」は疑問ではなく問題認識の共有を促す条件提示の強調を意図していて、話題の事項が<そうになってしまう場合がある→そうなくても良いだろう→そうしてしまおう>くらいの気持、かと思う。

\*ただいささかまどろむともなき夢に(万感の思いを込めて気を果たした藤君は、その気倦さの中でほんの束の間の微睡むでもない夢に)、\*この手馴らしし猫の(この飼った猫が)、いとらうたげにうち鳴きて来たるを(とても可愛げに鳴きながら寄って来たのを)、この宮に奉らむとて(この宮にお返し申そうと)、わが率て来たるとおぼしきを(私が家から連れて来たものと思えたのだが)、何しに奉りつらむと思ふほどに(どうしてお返し申す気になったのだったかと思う時に)、\*おどろきて(目が覚めて)、いかに見えつるならむ(何でこんな夢を見たのだろう)、と思ふ(と思うのです)。\*「ただいささかまどろむともなき夢に」は注に<情交の最中の夢。『集成』は「この前後、宮との間に密通のことがあったことを暗示する」。『完訳』は「情交の象徴的表現」と注す。>とある。確かに、はっきりと情交の場面と分かる数少ない箇所文ではあるようだが、私は「情交の象徴的表現」は、むしろ上文の「思

ひ乱れぬ」であって、此処の文は射精後の気倦さの中のまどろみ、と読みたい。で、下に語られるその微睡の中身こそが藤君の万感の思いの「象徴的表現」なのだろう。 \*「この手馴らしし猫」は注にく以下、夢の中の描写。柏木が夢の中で不思議に思いながら見た夢という描写。『細流抄』は「懐妊の事也」。『岷江入楚』は「獣を夢みるは懐胎の相なり」と指摘する。当時の俗信。>とある。そうなのか、と思う他は無い注だ。ともあれ、この猫はあの蹴鞠の日に御簾を引き上げた唐猫のことらしく、藤君はその猫を手に入れようと画策して、日頃から出入りしていた時の皇太子(今上帝で姫宮の兄)が猫好きだったので、彼にその猫に興味を持たせて、その妃である桐壺妃を介して妹宮の女三の宮から彼がその猫を貰い受けるように仕組んで、彼から藤君がその猫を少し借り受ける、という段取りで事を実現した話は本巻一章二段に記されていた。が、それも六年前のことだが、そのまま猫は返さずのネコババ終いだっらしく、それにまだ生きてもいるらしい。いや、実際には此処に連れて来てはいないようだから、生きているのか死んだものかは、実は分からない。そして、この「この手馴らしし猫の、いとらうたげにうち鳴きて来たるを、この宮に奉らむとて、わが率て来たとおぼしき」という語りは、藤君が姫宮を「手馴らし」て「いとらうたげにうち鳴きて来たる」を「この宮に奉らむとて(心底から願って)」「わが率て来たとおぼしき(その実現を果たすべくやって来た心算だった)」という藤君の本心を、「夢」という形で藤君の自白として読者に読ませる工夫だ。確かに「猫」は象徴的だが、そうすることで「いとらうたげにうち鳴きて来たる」という具象的な性愛表現を可能にしているのだろう。それは宮の実際の性反応ではなく、藤君の願望に過ぎないとしても、それを追求した情交場面を読者は思い描ける。藤原宗家の御曹司と内親王の情交場面に興奮しない宮廷読者の居る筈も無い。 \*「おどろく」はく目を覚ます>だが、当然にもくびっくりする、はっと我に帰る>との複意語用だ。尤も、この文は複意語用満載というより、二重文意であること自体が作者の意図であり、こうした作文技巧はこの物語には何度も使われていて、もしかするとそれが古文の特性の一つかと思ったりもしたが、現代語でも、そして恐らくは他の言語でも、こういう言葉の洒落語用はヒトの思考方法に元々ある性質のような気がして、だから通じるのだろうとも思う。ただ、この作者はこういう語り口が得意または好き、ということはあるのかも知れない。それが文章の表現力であったり、作者の味わいであったりするのだろうが、染色体が自己複製して細胞分裂に際して情報伝達して行く機構の二重性を思うと、仮に変異を度外視して伝達物質自体に絶対的な同一性があるとしても、その物質が或る時点で或る空間に在る客観的な意味はその都度変わる、という世の無常観で性交渉の危うさを説くような趣があって、こうした二重文意は妙に色っぽい。ともあれ、「目を覚ます」に対応する「何しに奉りつらむと思ふほどに」の文意はくどうして宮に猫をお返し申す気になったのだろうと思う時に>であり、「我に帰る」に対応する文意はく何故お抱き申し上げてしまったのだろうと事の重大さを考える内に>だ。で、「いかに見えつるならむ」の表意はく何でこんな夢を見たのだろう>で、複意はくどうしてこんな寝所にまで来てしまったのだろう>だ。

宮は、いとあさましく(宮はあまりにも意外で)、うつつともおぼえたまはぬに(現実ともお思え為されない藤君の狼藉に)、胸ふたがりて(胸が塞がって)、思し\*おぼほるるを(呆然となさっていらっしやるのを)、 \*「おぼほる」は「溺ほる」と漢字表記がありく溺れる、思い耽る、正気を失う>と古語辞典にある。

「なほ(どうしても)、かく逃れぬ御宿世の(このように逃れられない御因縁の)、浅からざりけると思ほしなせ(浅くなかった標とお思い下さい)。みづからの心ながらも(こういう次第となったのは、私自身の気持から起こった事ながらも)、\*うつし心にはあらずなむ(平静ではなく、熱に浮かされてのことだったように)、おぼえはべる(思えます)」 \*「うつしころ」は「現し心」でく気持のたしかではっきりしていること。正気。生きた心地。>と古語辞典にある。ただ、この文をく我ながら正気の沙汰とは思えない>と言ってしまうと、あまりにも無責任な言い方になるので、言い換えには気を使う。



かのおぼえなかりし御簾のつまを猫の綱引きたりし夕べのことも聞こえ出でたり(あの不意のことだった御簾の端を猫の綱が引き上げて姫宮の姿が見えてしまった六年前の蹴鞠の日の夕べのことも藤君は話し出しました)。

「げに(そうか)、さはたありけむよ(そんなことまであったのだ)」と、\*口惜しく(と無念で)、契り心憂き御身なりけり(前世からの因縁と言われた衛門督との肉体関係が恨めしい宮の御立場なのでした)。\*「くちをし」は<不本意だ。残念だ。情け無い。>と古語辞典にある。是が後悔の念なら、本巻一章二段に、冷泉帝の弘徽殿女御が藤君の実の妹ながら、藤君に物越しで会うほど慎み深いのに比して、姫宮は男に姿を見られるなどは不注意だ、と藤君自身が思う記事があって、姫宮も自分の不注意を後悔したのだろうか。とも考えたが、姿を見られたから寝所に忍び込まれた、という言い方で、いくら貴族の女は男に姿を見せない風習だった時代だとは言え、狼藉の責任を女に取らせるとするのは余りにも女に酷で、それも幾らかの不注意はあったにせよ咄嗟の出来事で故意に見せびらかしたのもでも無し、そんな事故まがいの、それも六年前の事を後悔するというのは、実の所は何を反省すれば良いのか分からず、現実的な説得力が無い。で、この「口惜し」は自分の運命全体が残念な気持、とは即ち<無念だ>ということだろう。

「\*院にも、今はいかでかは見えたてまつらむ(殿にも今はどうしてお目にかかれましよう)」と、悲しく心細くて、いと幼げに泣きたまふを(と悲しく心細くて宮がとても幼げにお泣きなされるのを)、いとかたじけなく、あはれと見たてまつりて(藤君はとても恐れ多くいたわしく拝見申し上げて)、\*人の御涙をさへ拭ふ袖は(宮の御涙まで拭う藤君の袖は)、いとど露けさのみまさる(ますます濡れる一方です)。\*「院」は六条院源氏殿らしい。紛らわしい。\*「人の御涙をさへ拭ふ袖はいとど露けさのみまさる」は歌語的な言い回しに見える。下敷きの歌がどこかに有りそうに思うが、注にその指摘は無い。で、どんな含みがある文意なのかは分からない。

#### [第七段 きぬぎぬの別れ]

明けゆくけしきなるに(夜が明けて行く気配だが)、出でむ方なく(悲しむばかりの宮を残し申しては、藤君は帰りようも無く)、なかなか(どっちつかずなのです)。

「いかがはしはべるべき(どう致したものでしょう)。いみじく憎ませたまへば(深くお憎みあそばすので)、また聞こえさせむこともありがたきを(これ以上は何も申し上げ難いのですが)、ただ一言御声を聞かせたまへ(一言だけでも御声をお聞かせ下さい)」

と、よろづに聞こえ悩ますも(と藤君が何度もくどく返事を求め申すのも)、うるさくわびしくて(宮には厭で辛く)、もののさらに言はれたまはねば(一向に何も仰れないので)、

「\*果て果ては(此処まで来ると)、\*むくつけくこそなりはべりぬれ(余りの強情さに、嫌気も差してきますよ)。\*また、かかるやうはあらじ(普通はこんなことは無いものです)」\*「果て果ては」は注に<以下「かかるやうはあらじ」まで、柏木の詞。末摘花の無口が想起される。>とある。女三の宮を末摘花に比べるには立場に違いが有りすぎる気もするが、確かに王家筋故の不可侵の誇りが世間離れしているという共通性はあるだろうし、その身に関わる重大な話題を滑稽譚にしている語り口にも共通性があると思う。だから恐らく、基本的には二枚目であろう藤君が、ちょうど末摘花巻で源氏殿がそうであったように、惨めな三枚目を演じているのが、この場面の面白さの一つではあるのだろう。ただ、是と言って有力な身寄りの無い末摘と、今上帝

を兄とする女三の宮とでは、同じ王家血筋とは言っても、実勢事情には差があり過ぎて、この話は笑い飛ばすには少し重いように、私のような者でも感じる。尤も逆に、此处での話が藤壺事件の重々しさも、実態はこの程度の浅ましきだった、と作者が示しているようにも思えたりして、原作者なり補作者なりが記したこの物語の当時の受け止められ方が、とても生活実感に近いものだったらしい、とも想像しうる興味深い文章と見ることも出来るのかも知れない。 \*「むくつけし」は<いとわしい。いやだ。>とか<気味がわるい。おそろしい。>などと古語辞典に語意解釈がある。語感上は<ムカつく>に近い<憤り>かと思うが、それは対象の<一方的な強引さ=思い遣りの無さ>に耐えられなくなった時に起こる感情であり、やはり「向く着く」という認識が背景にある気がする。 \*「また」は類似例を参照する考察を示す語で、否定文中なら<他には(見当たらない)>という言い方だろうが、日常語の曖昧さで言うなら<普通は(違う)>くらいだ。

と、いと憂しと思ひきこえて(と藤君は宮をととても不満に思い申して)、

「さらば\*不用なめり(これ以上お願いしても、もう無駄のようですね)。身を\*いたづらにやはなし果てぬ(私は死んでしましましょう)。いと捨てがたきによりてこそ(私の気持ちをお分かり頂けないままでは、とても諦めきれないと)、かくまでもはべれ(こうしてお願いして来ているのです)。今宵に限りはべりなむもいみじくなむ(今宵限りの命と思えば思いもいっそう募ります)。つゆにても御心ゆるしたまふさまならば(露ほどにでも御心を開いて頂けるようなら)、それに\*代へつるにても捨てはべりなまし(それに引き換えるものとしてこの命を捨ててしまえるのに)」 \*「不用」は仮名も「ふよう」で意味も<不要>らしいが、他に<役に立たないこと。むだであること。だめなこと。不用意なこと。>などとも古語辞典にあり、どういうことを言っているのかその対象の状態や中身が分からないと、どう言い換えて言いものか定まらない。「さらば不用なめり」は<もう無理なようだ>とか<それでは仕方がないようだ>くらいの言い方に見えるが、是が宮の気持ちを言葉で確かめたいという藤君の願いに対するものである事は確からしい。が、是に続く言葉との相互関係で全体の発言意図と各語の意味合いを、この場に即して考える他は無い。この「不用」に限らず、発言文はそのように解釈すべきだろうが、それにしても「不用なめり」は語感が取り難い。 \*「いたづらになす」は<死ぬ>という意味らしく、注には<明融臨模本、朱合点あり。『河海抄』は「夏虫の身をいたづらになすことも一つ思ひによりてなりけり」(古今集恋一、五四四、読人しらず)を引く。しかし『岷江入楚』が「不及此歌」と批判して、現行の注釈書では引歌として指摘されない。>とある。「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページによると、この歌は<「思ひ」の「ひ」に「火」が掛けられていて、虫はその火によって誘われ身を焼かれて死に、自分も恋の「思ひ」に惑わされ身を焦がしているのだ、ということ。>と解説されている。此处での語用に対する引歌には「不及」なのかも知れないが、「いたづら」という語自体の用例としては面白い歌かと思う。 どうか、古語辞典の当該項目にこの歌が引かれていた。 \*「代へつる」の「つる」は動作完了の助動詞「つ」の連体形で<換えてしまったもの>だが、仮定文の条件項を過去完了で語る古典文法は現代語では現在形の強調の意の印象だ。例えば、「換える」を<引き換える>。「にても」の「に」は対象の格助詞、「て」は条件提示の接続助詞、「も」は条件項が述辞に該当する事物の類型範囲に許容される意味を示す係助詞で、「代へつるにても」は<引き換えるものと考えれば以下のことに該当する>という論理。「捨てはべりぬ」は<捨ててしまいました>。「まし」は反実仮想にあって可能・妥当・願望などを示す助動詞で、「捨てはべりなまし」は<いっそ捨ててしまいたかった>や<捨ててしまえたものなのに>くらいの言い方。投げやりな口調。

とて、\*かき抱きて出づるに(と言って宮を掻き抱いて母屋を出してしまうので)、果てはいかにしつるぞと(衛門督は一体どうする心算なのかと)、あきれて思さる(宮は呆然となさいます)。 \*「かき抱きて出づるに」は注に<柏木が女三の宮を抱いて御帳台の浜床の下から端の方へ出る。>とある。先に、藤

君が宮を寝台から外へ抱き下ろしたのは「うちかしこまりたるけしき見せて、床の下に抱き下ろしたてまつるに」(五段)とあったが、そこは御帳台が設置されている寝殿母屋の西部屋なワケだ。其処を出た、というのは少し意外だった。いくら人少などと言っても、廂の間に出れば、仮に其処に人が居ないにしても、開放空間なので何処からか人に気配を察知される可能性は大きいのではないか。このような絶対秘儀に際して取れる行動とは思えない。せめて、廂の間も意外と御簾や几帳で遮蔽効果が高く、然程には開放空間ではなかった、と置いて置く。

\*隅の間の屏風をひき広げて(西南角の廂の間の妻戸前に目隠しに屏風を引き広げてから)、\*戸を押し開けたれば(外の様子を見ようと、その戸を少し押し開けてみれば)、\*渡殿の南の戸の(西の対との渡り廊下の庭へ降りる衝立が)、昨夜入りしがまだ開きながらあるに(昨夜忍び込んだまま横に退けてあって片付けられていなかった)、\*まだ明けぐれのほどなるべし(まだ誰も起きて来ていない、夜明け前の暗がりの時分らしく、もう少しは時間があると考え)、ほのかに見たてまつらむの心あれば(少しは宮の御顔を拝し申せると判断して)、格子をやをら引き上げて(藤君は明かりを取るために半蔀格子窓を静かに引き上げて)、\*「隅の間の屏風をひき広げて」はく寝殿の西側の西南の隅の柱と柱の間に屏風を広げる。人目を避けるため。>と注にある。「隅の間」は西南角の廂の間らしい。\*「戸を押し開けたれば」は屏風で目隠しをしたくらいだから、外へ出る心算ではなく、外の様子を窺う心算で少し開けてみた、と読んで置く。\*「渡殿の南の戸」が分からない。西に対屋が無ければ、寝殿の西南角から中門廊が南庭へ続いていることもあるのかも知れないが、姫宮の御部屋構えに付いては若菜上巻六章一段の姫宮受入整備の説明に「かくて、如月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ。この院にも、御心まうけ世の常ならず、若菜参りし西の放出に御帳立てて、そなたの一、二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせたまへり。」とあった。是は六年前のことだが、基本的な使用構成が変わっていないとしたら、此処で言う「渡殿」は西の一の対に続く南庭に面した廊下の筈で、その「南」側に壁は無いだらうから、その「と」とは「戸」ではなくく庭への降り口>のように思える。ただ、それが「昨夜入りしがまだ開きながらある」ということは如何ということなのか。どうせ当て図法なのでどんどん進めれば、その「庭への降り口」はく通用門>なので、庭には簡素な梯子か数段の踏み台が用意してあって、廊下には腰高ほどの衝立が置かれてあった、というのは如何だろう。で、その始末がしてなかった、例えば衝立が横に退けられたままだった、というのは如何だろう。いや、それくらいの不始末は女房や下働きの日常的なちょっとした不注意で事が済む。そうか、藤君は小侍従に呼ばれるまで庭に潜んでいたのか。辻褃が合うから是が良さそうだ。\*「まだ明けぐれのほどなるべし、ほのかに見たてまつらむ」は「心あれば」と語られているように、藤君の情勢判断だ。

「かう、いとつらき御心に(あなたのこのような連れない御態度に)、うつし心も失せはべりぬ(冷静さを失って、何をしでかすか自分にも分かりません)。すこし思ひのどめよと思されば(少し落ち着くようにとお考え下されるなら)、あはれとだにのたまはせよ(気持は分かったとだけでも仰って下さい)」

と、\*脅しきこゆるを(と脅し申すのを)、いと\*めづらかなりと思して物も言はむとしたまへど(本当にただごとではないとお思いになって何か言い出そうとなさったが)、わななかれて、いと若々しき御さまなり(震えて声も出ず、まるで子供のようなご様子なのです)。\*「おどす」は交渉事に於いて、相手の納得が得られそうも無い時に、自分の意向を通す為に、従わないと危害を加える、と迫る説得工作で、物欲の場合は効果があっても、信頼関係は期待できない。ただ、服従関係に一定の給付が担保されている多くの上下関係は組織構成上に不可欠の様式なので、その社会認識を遊戯化することで成立する人間関係はある。それでも双方の価値観に一定の共通認識がなければ破綻する。ましてこの場合は、予備段階の文通もなさそうで、

ほぼ強姦事件のような狼藉なので、それでも大概の女なら藤原君を拒否する筈も無いが、宮は内親王であり、それも今上帝の妹宮であってみれば、よほどの幸運な出会いでもない限り、上首尾は期待できない。ともあれ、この「脅しきこゆ」に呼応して、上の「うつし心も失せはべりぬ」に「何が起こるか分からない」を補語した。\*「めづらか」は「普通と違っているさま。」と古語辞典にある。この語は「めづらし(愛すべき)」とは違う語感だが、同じ「めづ(愛づ)」を語幹にするのだろうか。今ひとつ感触がつかめない語ではある。が、ともあれ、ナリ活用の形容動詞なので「めづらかなり」は「めづらか」の終止形で「普通ではない」という言い方で、「いとめづらかなり」は「本当に変だ＝とてもただごとではない」ということ、かと思う。注には是を「女三の宮の心中。『集成』は「何ということ言う人か」と。『完訳』は「なんと無体なことを」と訳す。」という文意としてあって、訳文もそれに則っているが、私には全く意味不明な解説だ。慌てて物も言えない、というのが「いと若々しき御さまなり」の描写としては自然だし、そう取るのが素直な解釈だ。

ただ明けに明けゆくに(そのまま夜がどんどん明けてゆくので)、いと心あわたたしくて(藤君はとても気が急いで)、

「\*あはれなる夢語りも聞こえさすべきを(あなたを偲んで手懐けた猫が現れた懐妊の相となる夢の話もお聞かせしたい所ですが)、かく憎ませたまへばこそ(このように私を憎んでおいででは、お話し申せたものではありません)。さりとも(しかし)、\*今思し合はすることもはべりなむ(そのうち御思い当たる事になるでしょう)」 \*「あはれなる夢語り」は「猫の夢をさす。」と注にある。 \*「今思し合はすることもはべりなむ」は注に「懐妊の事実となって知られよう、という意。「な」完了の助動詞、確述。「む」推量の助動詞、推量。きっと一するだろう、という気持ちを込めたニュアンス。」とある。この注は助かった。是が懐妊を示唆した言い方とは、私には分からなかった。だから、この文は何を言っているのか分からなかった。そう言えば確かに、猫の夢についての注には「『細流抄』は「懐妊の事也」。『岷江入楚』は「獣を夢みるは懐胎の相なり」と指摘する。当時の俗信。」とあって、是が「当時の俗信」でなければ、猫の夢の話もあまりに露骨な性描写となって、却って書き難かったのかも知れないし、此处の文意も当時の読者向けには分かり易かったのかも知れない。で、「夢語り」のところに「懐妊の相」を補語した。が、藤君はその猫の夢の話も宮にはしていないのだから、読者は「今思し合はすることもはべりなむ」のかと納得したかも知れないが、宮自身は「思し合はすること」など有る筈が無い。しかしまあ是は、藤君の思い込みでの独り言、くらいに読んで置けば良さそうだ。藤君の言う通り、どうせ宮は何を言っても聞く耳は持っていないだろうから。

とて(と言って)、のどかならず立ち出づる明けぐれ(慌しく帰り掛ける夜明け前は)、\*秋の空よりも心尽くしなり(秋の空より思いの深まる風情なのでした)。 \*「秋の空よりも心尽くしなり」は次の歌が、この日が初夏の「四月十余日ばかりのこと」(四段)にも関わらず、秋の歌詠みの「露を置く(涙に濡れる)」という言い回しを使っていることの断り、らしい。

「起きてゆく空も知られぬ明けぐれに、いづくの露のかかる袖なり」(和歌 35-08)

「暗がりて 思いも掛けず 濡れた袖」(意識 35-08)

\*注に「柏木の贈歌。「起き」と「置き」の掛詞。「置く」と「露」は縁語。「露」は涙を象徴。「空も知られぬ」と「いづくの露」が響き合う。」とある。「おく」は「起く」と「置く」との掛詞、とは注にもあるが、「起きてゆく」は「目覚めて出てゆく」なのだろうか。此处の「起く」は「寝起き」ではなく「事が起きる」であり、その「事」とは

姦通>よりも<受胎>なので、「空も知られぬ」は懐妊を<宮が全く知らない、気付かない>という意と<その子の先行きがどうなるか分からない>という意であり、その波乱の予感が「いづくの露のかかる」という不安になる、という歌意が込められた詠み方なのだろう。また表意は「秋の空よりも心尽くし」と断つてあるように、「おく」は露を「置く」情緒であり、その「置く」は<心に隔てを置く>でもある。だから、「置きて行く空も知られぬ明けぐれに」が<秋でもないのに草花に露を置く季節を知らない初夏四月の夜明け前だが、心が通わないまま帰って行く恋の先行きの見通しもない暗がり>で、「いづくの露のかかる袖なり」が<思わぬことで涙に暮れる事になったもの>という歌筋の、含みの有る失恋歌だ。

と、\*ひき出でて愁へきこゆれば(と藤君は宮の袖を引っ張って恋情を訴え申せば)、\*出でなむとするに(藤君が部屋を出掛かった時に)、すこし\*慰めたまひて(宮は少し衛門督を慰めなさつて)、\*「引き出づ」は<引き出す>だから、歌に詠んだ「かかる袖なり」に引っ掛けて、宮の袖を引っ張った、ということらしい。そして、この「引き出づ」には<コトを仕出かす>という意と<引出物として贈る>という意も古語辞典に示されていて、その全てを引っ掛けたずいぶん練れた洒落言葉になっているようだ。\*「出でなむ」の「なむ」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形に意志の助動詞「む」が付いたくし終えてしまいそう>という言い方。\*「なぐさむ」は、自分の気が休まる、自分の気を休める、という意味と、他人の気を休める、という意味とがある。が、語尾のマ行が、自分の事の場合には四段活用となって、人に対しての場合には下二段活用になる、と古語辞典に説明がある。此处では「慰めたまふ」と下二段の連用形「め」で「たまふ」に繋がっているので<藤君を気遣いなさる>という言い方だ。宮自身がホッとしたのなら「慰みたまふ」だろう。尤も、藤君がやっとなって出て行くようなので、宮にも少し余裕が出来て、何とか返歌することが出来た、ということはあるかも知れない。が、それでも此处の文意は<藤君を慰めなさつた>だ。

「明けぐれの空に憂き身は消えななむ、夢なりけりと見てもやむべく」(和歌 35-09)

「いっその身が消えたなら、夢の話で済むものを」(意識 35-09)

\*注に<女三の宮の返歌。「あけぐれ」「空」の語句を受け、また「露」「置く」の語句を「夢」「消え」と返す。『完訳』は「「夢」は柏木のいう夢ともひびくが、源氏・藤壺の密会の贈答歌(若紫)にも発想が類似」と注す。>とある。「ななむ」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形に願望の終助詞「なむ」がついたもの、と古語辞典に説明がある。多くは会話文で<～してしまいたいものだなあ>くらいの言い方なのだろう。「止む」は<終わりにする>だから、無かった事にしたい、という身も蓋も無い歌、に見えなくも無い。だから、「すこし慰めたまひて」が宮自身への慰めに思える、ということはあるのかも知れない。が、一言も発しなかった宮が返歌すること自体が藤君にとっては、どれほどの救いになることか。それにこの歌は、深層心理なり第六感なりで懐妊を察知する、または恐れた歌、に見えなくも無く、であれば、肉体の実感があった、という返答に思えなくも無い。因みに、若紫巻二章一段にあった「源氏・藤壺の密会の贈答歌」は、「見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちに、やがて紛る我が身ともがな」(和歌 5-16)が<こんなに辛い恋ならいっそ死んでしまいたい>みたいな源氏の贈歌で、「世語りに人や伝へむたぐひなく、憂き身を覚めぬ夢になしても」(和歌 5-17)が<死んだら余計に噂が立つ>みたいな藤壺の答歌だった。確かに、「夢」と「死」と「懐妊」あたりが意識されているという「類似」はあるのかも知れない。まあ、どちらもそれほど危険な不義密通だ、ということではあるだろう。「源氏・藤壺の密会」当時は、源氏 18 歳、藤壺 23 歳。今の藤君は 32 歳(推)、姫宮 21 歳、というところ。似ている面もあるだろうが、ずいぶん事情が違うような気がする。

と、はかなげにのたまふ声の(と消え入りそうに返歌なさる宮の声が)、若くをかしげなるを(若さがある印象深いのを)、聞きさすやうにて出でぬる魂は(昇る太陽に追い立てられるように気忙しく、聞き終えもしないようにして帰って行ってしまった男の恋心は)、まことに身を離れて止まりぬる心地す(後ろ髪を引かれるどころか、本当に体から抜け出てそこに残っているように感じたのです)。

#### [第八段 柏木と女三の宮の罪の恐れ]

\*女宮の御もとにも参うでたまはで(藤君は妻であり姫宮の姉宮である女二の宮の所にもお帰りなさらずに)、\*大殿へぞ忍びておはしぬる(実家の大臣邸の方へ人目につかないようにひっそりといらっしやいました)。\*「をんなみやのおおんもと」は<妻の女二の宮の所>という言い方。「妻の所に帰らない」というのは、今で言えば<自宅に戻らない>という意味だが、藤君が独立した家を構えていたのか、女二の宮の実家に通っていたのか、未だに説明が無く、ただ女二の宮は「下臈の更衣腹」(一段)と語られていたので、藤君はさっさと新居を構えたような気もするが、「下臈」といっても入内に適う家柄ではあるわけで、「御もと」が女宮の御身分を示すのか、実家という御事情を示すのか、当時の通い婚の実態など私は知らないし、こういう書き方をされても理解に苦しむ。\*「大殿(おほとの)」は<実家の大臣邸>のようだが、其処には以前と同様に自室があるらしい。この語の語感も分からない。藤原殿が致仕大臣だから「大殿」なのか、貴人の実家だから「大殿」なのか、その複意なのか、客観的な説明も無く、当たり前のようにサラッと書いてあるのは、当時の現代語小説ならではなのだろうが、こういう文章は今となっては客観的な意味を示す補語が必要なのに、その補語が分からない。また、「忍びて」の実態もどういふものだったのか。貴人の外出の際に護衛官を勤めた近衛舎人の隨身は衛門督に四人、納言に六人、と古語辞典にあるが、その他にも個人的な従者が数名は必ず随行した筈で、迎える家の方にも、気心の知れた者の数名は控えていた筈で、是は六条院に出向く際にも気になっていたことだが、それらを極力簡素にしたとしても、藤君ほどの身分の者に外出での全くの単独行動は考えられず、実際の生活感、突き詰めた心理状態、みたいなことは実は分からない。

うち臥したれど目も合はず(横にはなつたが寝付けず)、見つる夢のさだかに合はむことも難きをさへ思ふに(あの懐妊の夢が本当に当たるかどうか分からないことを思うにつけても)、\*かの猫のありしさま(夢で見た猫が自分に従順に従う様子が)、いと恋しく思ひ出でらる(本当に願わしく思い出されたのです)。\*「かの猫のありしさま」は、六段に「この手馴らしし猫の、いとらうたげにうち鳴きて来たるを、この宮に奉らむとて、わが率て来たる」と征服欲を丸出しにした藤君の野心が語られていた。藤君の本懐は、王家に食い込むこと、だ。そして、それは実権としては撰閑家になることだが、その実現は政治情勢の運次第なので、どんな手を講じても担保し得ない頼り無さであり、仮に上首尾を見たとしても当代限りのはかなさだし、本質的な王族への関与は宮腹への胤付けでこそ適うものだと思込んでいる、らしい。それも、その「宮腹」とは、単に王家血筋を引く者ではなく、藤君が王家の伝統を体現していると認識した対象とは即ち、女三の宮に限られる、という価値観らしい。昨夜の狼藉は藤君にとって、その生存意義としての使命を掛けた、正に命懸けの賭け、だったものようだ。その夢の浅ましさに藤君自身が気付いて、直ぐに「と、おぼしきを、何しに奉りつらむと思ふほどに、おどろきて、いかに見えつるならむ、と思ふ」と冷静に事態を見極めようとしたように語られていたが、こんな命懸けの一大事に冷静で居られる筈も無く、こうして煩悶している、のだろう。いや、だから実戦で冷静に戦えるように日頃の訓練をするのだが、召人相手に経験を積んでも、血筋としての王族の女を抱いても、本懐を遂げる相手としての姫宮を前にしては、藤君には勝手が違いすぎた、のだろう。姫宮の幼さを抱え込む余裕は、少なくとも当日の藤君には無かった。

「さてもいみじき過ちしつる身かな(これは大変な過ちをしたものだ)。\*世にあらむことこそ(中納言の重責を担うには)、\*まばゆくなりぬれ(恥ずかしいほどだ)」 \*「世にあらむ」の「世」は<朝廷=おほやけ=公職>だろう。今の藤君の役職は中納言兼衛門督、官位は従三位だろうか。 \*「まばゆし」は<照れくさい、恥ずかしい>。

と、恐ろしく\*そら恥づかしき心地して(と藤君は自分のした事が恐ろしくとても肩身の狭い気がして)、ありきなどもしたまはず(外出などもなさいません)。 \*「そら恥づかし」の「そら」は接頭語で、その意を<途方も無く、漠然とした>と取ると「空」に通じるようにも見えるが、むしろ<とても大きな、多量の>と取れば「そこら(幾許)」に近いのかも知れない。ただ、今では「そら恥ずかしい」は使わないが、「そら恐ろしい」は使うので、是は奇妙な文に見える。また、「恥づかし」は現代語の<恥ずかしい>と似ている時もあるが、古語では基本的には個人感情よりは社会的な立場上の都合の悪さを示す語のようで、その地位の威厳を損なうという意味で<きまりが悪い、面目ない、気後れする、気が引ける>という言い方になるようだ。現代語の「恥ずかしい」も社会的な体面の悪さから<居た堪れない気まずさになる状態>で使われるように思うが、立場が悪くなった原因はさて置いて、「恥を搔いた」その場の取り合わせの不手際を問題視するかの語用が多い。しかし古語の「恥づかし」は「恥を知るべき」原因の方を問題視しているようだ。ともあれ、訳文の<身もすくむ思い>はイイ線いってるが、などとエラソーだが、いっそもう少し社会性を出して<肩身の狭い>くらいまで言えそうだ。

女の御ためはさらにもいはず(密通相手の女の姫宮の立場にとっては言うまでも無く)、わが心地にもいとあるまじきことといふ中にも(自分の倫理観からしても是は全く不届きな不義だという判断に於いても)、むくつけくおぼゆれば(情けない事になったと思えるので)、思ひのままにもえ紛れありかず(とても気楽に遊び歩くことは出来ません)。

帝の\*御妻をも取り過ちて(帝妃までを盗み取るという過ちを犯して)、ことの聞こえあらむに(それが露見した場合に)、\*かばかりおぼえむことゆゑは(その帝への反逆罪の咎を負う責に、はっきりと自分に中納言という公僕たる立場上の自覚がある以上は)、身のいたづらにならむ(身が亡骸になることも)、苦しくおぼゆまじ(辛くは思わないだろう)。 \*「御妻」は「みめ」と読みがある。「みめ」は<妃(きさき)・女御(にょうご)など、身分の高い人の妻を敬っていう語。>と大辞泉にある。 \*「かばかりおぼえむことゆゑは」の文意について、注には<「おぼゆ」の内容について、『集成』は「これほど不埒なと思われることのためなら」。『完訳』は「今の自分のように苦しい思いを味わわせられるのだったら」と訳す。>とある。ということは、問題は「おぼゆ」よりは「かばかり」の方にありそうだ。ところで、此処の文は論理思考における仮定構文中の条件項を示していて、全体で見れば、その場合には「身のいたづらにならむ」という結果を見ても、「苦しくおぼゆまじ」という論理評価が下されている、という文述構成だ。そして、「身のいたづらにならむ」は下に「しか顯著き罪」と言い換えられていて<死罪>を意味し、その量刑の妥当性は<帝への反逆に対する罰>だと、藤君は考えているらしい。だから、下の文で<自分の犯した罪は、帝を裏切ったわけではないので死罪になるほどの大罪では無いだろうが、六条殿に対する非礼には当たり、済まなく思う>と語られているのだろう。つまり、「かばかりおぼえむ」は中納言兼衛門督という公人として<帝への反逆罪の自覚をすべき己の立場>を確認する、という考え方を示している。「ことゆゑは」は<～であるからは、～である以上は>で、今だと「ことゆゑに(なのだから)」が似たような言い方になるかと思うが、やはり再確認や再認識を試みる論理に見える。で、少しくどいが左様に補語する。で、『完訳』の解釈に則ったような渋谷訳文の「これほど苦しい思いをするなら」と、「かばかり」を藤君の<心情>と取って論理思考を覆すかの解釈は、同意できない。また、与謝野訳文の「これほどの熱情で愛している相手であったなら、処罰を快く受けるだけで、このやましきはないはずである」という文意解釈も、この文の論理思考構成を読

んでいない。ただ、面白い解釈で、この文からそういう意図を感じ取る感性までは否定したくない。などと、ずいぶん上から目線で言うのも、私的に小説を読む者の特権だ。

しか(私の犯した罪が、そのような死罪という)、いちじるき罪にはあたらずとも(重罪には当たらないとしても)、この院に目をそばめられたてまつらむことは(六条院殿に睨まれているだろうと押し申し上げることは)、いと\*恐ろしく恥づかしくおぼゆ(とても恐れ多く身の縮む思いだと藤君は考えるのです)。\*「恐ろしく恥づかしくおぼゆ」は自分の立場の悪さに対する思いだが、前の「恐ろしくそら恥づかしき心地して」のような社会的な立場の悪さではなく、個人的な相手に対する自分の立場の悪さを意識している。ただ、個人的な事情と言っても、社会的な身分を前提にしたものではあるだろうが。

限りなき女と聞こゆれど(限りなく身分の高い女と申しあげても)、すこし世づきたる心ばへ混じり(少し世慣れた考えに染まって)、上はゆゑあり子めかしきにも(表面は上品で無邪気っぽくしていても)、従はぬ下の心添ひたるこそ(従順でなしに内心に我の強さがあると)、とあることかかることにうちなびき(いろいろな誘いに興じて流され)、心交はしたまふたぐひもありけれ(浮気をなさることもあるようですが)、

これは深き心もおはせねど(この宮は強い我をお持ちでは無いが)、ひたおもむきにももの懼ぢしたまへる御心に(ひたすら物怖じなさる御性分で)、ただ今しも(もう直ぐにも)、人の見聞きつけたらむやうに(密通が人に見聞きされたように)、まばゆく(恥じ入って)、恥づかしく思さるれば(後ろ暗くお思いになっているので)、明かき所にだにえみざり出でたまはず(御帳に籠もって、日が差す場所にいざり出ることなさらず)。いと口惜しき身なりけりと(本当に情けない身の上だと)、みづから思し知るべし(御自分を思っていらっしゃるようでした)。

悩ましげになむ(病気らしい)、とありければ(と知らせがあったので)、大殿聞きたまひて(源氏殿はお聞きになると)、いみじく御心を尽くしたまふ御事にうち添へて(大変真心を尽くしなさる紫の上の御看病に加えて)、またいかにと驚かせたまひて(宮までどうかしたのかと驚きなさって)、渡りたまへり(二条院から六条院にお戻りなさいました)。

\*そこはかと苦しげなることも見えたまはず(宮は何処が如何とはっきりと苦しそうなようにも見えなさらず)、いといたく\*恥ぢらひしめりて(もうとても引っ込み思案にしている)、さやかに見合はせたてまつりたまはぬを(はっきりと顔を見合わせ下さりなさらぬのを)、「久しくなりぬる絶え間を恨めしく思すにや(長く離れていたのを悲しんでいらっしゃるのだろうか)」と、いとほしくて(と殿は宮が愛らしくて)、かの御心地のさまなど聞こえたまひて(紫の上の御病状などをお話しなさって)、\*「そこはか」は、其処は是うと言うように<はっきりと>という言い方なのだろうか。\*「恥ぢらふ」は<恥づかしがる。はにかむ。>と古語辞典にある。が、「恥づ」は<はばかる、恐れる、遠慮する>とあるので、此処では<遠慮がる>と取りたい。で、「しむ(染む、浸む)」は<深く思い詰める>だから、「恥ぢらひしむ」で<引っ込み思案になる>として置く。

「今はのとぢめにもこそあれ(もう最期かも知れませんので)、今さらにおろかなるさまを見えおかれじとてなむ(この期に及んで寂しい思いをさせたくないものですから、あちらに付き切りなのです)。いはけなかりしほどより扱ひそめて(あちらは幼い時からお世話し始めて)、見放



ちがたければ(見捨てられないので)、かう月ごろよろづを知らぬさまに過ぐしはべるぞ(この数ヶ月は他のことは全て構わずに看病して来たのですよ)。おのづから(だから今日はとてもあなたを抱いて差し上げる気分にはなれませんが、私のあなたへの愛情のほどは自然と)、このほど過ぎば(この時期が過ぎれば)、見直したまひてむ(お分かり頂けるでしょう)」

など聞こえたまふ(などと申し上げなさいます)。かく\*けしきも知りたまはぬも(殿がこのように事情を少しもご存じないことも)、いとほしく心苦しく思されて(申し訳なく心苦しくお思いになって)、宮は人知れず涙ぐましく思さる(宮は人知れず涙ぐましくお思いになります)。 \*「けしきも」は、副詞語用の<少しも>と、名詞に係助詞が付いた語用の<事柄の事情も>との、複意なのだろう。

#### [第九段 柏木と女二の宮の夫婦仲]

督の君は(かんのきみは、押し入った藤君は)、\*まして(押し入られた宮以上に)、なかなかなる心地のみまさりて(進退窮まった気持ばかりが勝って来て)、起き臥し明かし暮らしわびたまふ(寝ても覚めても明けても暮れても思い悩みなさいます)。 \*「まして」は女三の宮に比較してそれ以上にの意。と注にある。問題を起こした張本人だから、と取って置く。

祭の日などは(葵祭りの日には)、物見に争ひ行く君達かき連れ来て言ひそそのかせど(良い物見席を取ろうと先を競う貴公子たちが仲間を連れ立って誘いに来たが)、悩ましげにもてなして(藤君は病気だと断って)、眺め臥したまへり(所在無く横になっていらっしやいました)。

\*女宮をば(妻の二の宮に対しては)、かしこまりおきたるさまにもてなしきこえて(敬意を持って礼儀正しく接し申し上げて)、をさをさうちとけても見えたてまつりたまはず(少しも親しげには御会い申し上げなさらず)、わが方に離れゐて(自室に離れ暮らして)、いとつれづれに心細く眺めゐたまへるに(まるで生氣無く気弱に庭を眺めて座していらっしやったが)、童べの持たる葵を見たまひて(庭先で童女が持っていた葵を御覧になって)、 \*「女宮」が話題になっているから、藤君は自宅に居るのだろう。

「悔しくぞ摘み犯しける葵草、神の許せるかざしならぬに」(和歌 35-10)

「摘みを犯した逢う日には、葵は髪に飾れない」(意訳 35-10)

\*注に<柏木の独詠歌。柏木、女三の宮との密通を罪と自覚する。「摘み犯す」と「罪犯す」。「葵」と「逢ふ日」の掛詞。『集成』は「あのお方に無理無体にお逢いするという大それたあやまちを犯して、くやまれることだ、神様が大目に見て下さる一世間に許される一挿頭(葵草)ではないのに」と訳す。>とある。「葵」の旧仮名遣いは「あふひ」で「逢ふ日」に掛かるワケだ。発音に近い仮名遣いなら「おうひ」だろうか。東京者には分かり難い語感で、この歌の味わいも直感的には分からない。また、徳川以前の権威として「神の許せるかざし」がどれくらいの格式だったものか、それを示すであろう葵の葉を髪に挿す葵祭りの風情も、東京者の生活実感には無い。それらを「くさ」の「草」と「種」に掛けた洒落た言い回しで、後悔の念と季節感と都の行事とが見事に詠み込まれた、時の王朝文化を今に伝える歌、とさえ思えるほどだが、語感の洒落を実感できないのは残念だ。で、「悔しくぞ」だけは分かる。

と思ふも(と後悔しても)、いとなかなかかなり(厄介なことに変わりはありません)。

\*世の中静かならぬ車の音などを(外の通りで騒がしい祭見物の牛車の往来の音などを)、よそのことに聞きて(別の世界の事のように聞いて)、人やりならぬつれづれに(どうしても起こってくるいろいろな心配事に)、暮らしがたくおぼゆ(辛い一日を過ごします)。\*「世の中静かならぬ車の音」が聞こえる、というのなら、祭り行列に近い今の御所に近い所に居宅が在ったのだろうか。などと考えても何の明示も無い。

女宮も(妻の二の宮も)、かかるけしきのすさまじげさも見知られたまへば(こうした藤君の様子が面白くなさそうなのもお分かりなので)、何事とは知りたまはねど(理由はご存じなかったが)、\*恥づかしくめざましきに(相談も無い事が面目なく心外でもあって)、\*もの思はしくぞ思されける(気懸かりになりがちに思われなさいました)。\*「恥づかし」は立場上不都合に思える事に対して自分を情けなく思う、という語感。此处では、夫の相談に与れない自分が<役目が果たせずに面目ない>ということ、と取って置く。\*「もの思はし」は「物思ふ(物思いをする、気懸かりに思う)」という動詞の未然形に傾向を示す接尾語の「し」が付いて形容詞化したもので<気懸かりになりがち>くらいの言い方、かと思う。ところで、此处で気になったのが、文法に於ける用言の語尾変化の活用形分類上の「未然形」という呼称の分かり難さだ。「未然」は<未だ然うなっていない>という未定状態を示す言い方だが、この活用が付く代表例の否定の助動詞「ず」の場合にしても、その動詞や形容詞が示す意味は<未然>ではなく<現在状態>なのであって、その<状態>の説明が下に付く語によって既定されるので、この活用形自体では語意が示せず、よって単独形が成立しないのだろう。ということは、此处で言う「未然」の意味は、活用語自体の語意ではなく、文法上で活用形だけでは語意が<成立しない=未定>ということを示していて、「未定形」と言っているようなものなのだろう。しかし「未定形」では、それこそ語意の<未来状態を示す>という、誤解を招く余計な意味に聞こえ易い。なので、これは文法の形式で「未然」とか「未定」とか説明せずに、活用の用法で説明する方が分かり易いのではないか。同様な分かり難さは「已然形」という呼称にもあって、「已然」が示そうとする文法上の意味は<その活用形自体で活用語の語意を示している>ということなのだろうが、使い方は見えて来ない。そこで、その用法が仮定文中の条件項提示に使われることが多いことから、「仮定形」とも言い表せられるらしいが、「仮定形」が代表的な用例というように取れば、使い方も類推できる。で、是に習えば、「未然形」の用法は事物の状態を指し示すことが多いようなので、そうした用例が代表的な語尾変化ということで、言い換えは<指向形>あたりで如何だろうか。とか、是は同じようなノートを既に以前にもしてあるかも知れない。以前にも同じようなことを思った気がする。

女房など、物見に皆出でて(女房などが祭り見物に皆出かけていて)、人少なにのどやかなれば(邸内に人が少なく静かなので)、うち眺めて(二の宮が物憂げに)、箏の琴なつかしく弾きまさぐりておはするけはひも(十三弦を手馴れて弾き慰めていらっしゃるらしい音も)、さすがにあてになまめかしけれど(さすがに上品で風情があったが)、「同じくは今ひと際及ばざりける宿世よ(同じ内親王を娶るにも六条殿には今一刻み身分が及ばず三の宮を逸した私の運勢だったことだ)」と(と藤君には)、なほおぼゆ(今なお未練に思われます)。

「もろかづら落葉を何に拾ひけむ、名は睦ましきかざしなれども」(和歌 35-11)

「なんで落葉を拾うかな、同じ髪挿しと言ったって」(意識 35-11)

\*注に<柏木の独詠歌。「もろかづら」は葵と桂の挿頭、「かざし」は姉妹、女三の宮と二の宮の姉妹をいう。>とある。大辞泉の「葵鬘(あふひかつら)」の項には<賀茂(かも)の祭に参列する諸役人の冠・烏帽子(えぼし)に挿し、

また牛車(ぎっしゃ)のすだれなどにも掛けた飾り。葵(フタバアオイ)の葉と桂(かつら)の枝を組み合わせたものを諸鬘(もろかずら)、葵だけのものを片鬘(かたかずら)という。>とある。フタバアオイは茎が地を這う草で、葉も茎も柔らかく単独では大きな飾りには成らないので、しっかりした枝のある樹木の桂と組み合わせる。遠目の形では桂の葉と葵の葉は良く似ている。が、フタバアオイは多年草とは言え、普通に冬枯れする。秋に黄葉して落ち葉を落とすのはカツラの方だ。姿として、朽ちた葵と黄葉の桂とでは桂の方が見映えする。が、言葉として、同じ挿頭の「落葉」の方と言えば桂が劣って聞こえる、かな。

と書きすさびみたる(などという歌を藤君は遊び書きして居るのです)、いとなめげなるしりう言なりかし(皇女に対して何と無礼な陰口なんでしょう)。